

Four worlds with each
season Ver. Woman

@1319

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日を境に1つの季節しか見ることしかできなくなった4つの世界。それを違和感と感じない一般人とは違い異変だと感じる4人の少女がいた。そんな彼女たちはどう動きどう解決するのか。

そして彼女たちを持っている宿命とは!?

同じ名前の作品がありますがシナリオは同じです。細部で所々変わったりはしますが大本の流れは変わりませんのでどちらか片方だけでも問題はありませぬ。

Twitterでアンケートをとった結果こちらの女性バージョンを優先させていただきます。ご了承ください。

目次

チュートリアル

ハジマリ

呼ばれたワケ

適性検査

戦う準備 その1

戦う準備 その2

戦う準備 その3

いざ戦闘訓練

これから

1

20

34

50

71

88

110

128

チユートリアル

ハジマリ

8月31日

この日地球とよく似た世界に大きな変化が現れた。その変化にある少女たちは気が付いた。これはその始まりの物語。

まず先に変化に気が付いた少女はさくらという、高校2年生の少女。その少女は学生生活の中で最高の休みである夏季休暇の最後の日を普段より遅くから始まる。そんな中、今日という日を思い出して声が出る。

「あー、今日ってナツ休み最後の日なのよね……。つてことは明日から学校か〜」

夏休みが終わることを憂鬱に感じながら、さくらは少し遅めの朝食を食べるためにリビングに向かった。

リビングに向かうと窓から外の景色が見える。それを横目にさくらは朝食を作りにキッチンへと歩みを進める。先ほど見えた景色は、まぶしい太陽の光と青空、そしていつも見ている家の庭に植えてある桜の木が咲いているということだった。

「あれ……？ 何もおかしいところはないわよね？ いつもと同じはず……」

朝食の準備をし、違和感を感じる目の前に広がっている光景を受け入れようとするさくらは現実を、事実を認識することにした。したのだが……、それでも感じている違和感はぬぐい切れなかった。

それもそのはず、今朝起きた時にはしつかりと意味が分かっていた単語が、今のさくらをつなぎとめているのだから。今は春の季節だ。それは今の景色を見ればわかること。だがそれではさくらの言ったことに矛盾が生じる。

「今日は、ナツ休みの最後の日だったはずよね？ カレンダーも8月31日だし。ってナツ休みってなんだっけ？ 今は長期休校だよ。あれ？ ナツってなんだっけ？」

さくらは自分が朝しつかりと理解していた単語に疑問を持ち始めた。寝ぼけていたから生まれた単語なのかと思つたが、それにしてもどこか懐かしさを感じる単語にますます疑問を感じる。いったいどこから生まれた単語なのか……と。

そう思つたさくらは、次第にその単語を繰り返し発声する。

「なつ、ナツ……。なんか暑そうなんかんじ……。？ 暑い？ なんで私はそう思つたんだ

ろ？」

繰り返し返しているとその言葉からイメージが伝わって来た。今のさくらには疑問が増えるばかりだった。考えても考えても一向に答えは出ない。思考を張り巡らせている間にトーストが焼けたことを知らせる音が鳴った。目玉焼きは少々焦げてしまっていたようだ。

できた朝食を食べていてもいまだ思考は止まらない。止めてはならない気がしていた。

「私は何かを知っている？ ナツも知っている……。でも今の私の記憶にはない」

一瞬、記憶喪失なのかと考えもしたがそれにしても部分的すぎるとすぐに考えを捨てる。もっと他に何かがあると思っただから。

いまいち食の進まないさくらは、料理が冷めていくことを気にせず次々と関係のありそうなことを思い出していこうとする。

「今は春のはず。桜も咲いているし気温だつて寒すぎず暑すぎない……。過ごしやすいキセツ。え……。？ キセツってなに？」

考えていたさくらからまたもや覚えのない単語。どこまで行つても答えの出そうにない事に、いまだ思考を止められずにいた。むしろ、謎が深まりそうな思考の旅をまだ続けているさくらには、今のこの状況下ではここでお手上げのようだ。

食事の手が止まっていることに気が付いたさくらは、慌てて食卓の上にあるトーストと目玉焼きをたいらげ自分の部屋へと戻る。自分の部屋のほうが、考えがまとまると考えたからだ。

「なんでこんな違和感を感じるんだろ……?」

朝起きてからずっとこの違和感をぬぐえないままもう一度外を見る。ふと、休みも終わりという状況で今回の休みの思い出を振り返ってみた。

思い出されるのは宿題を片付けたこと、家でグータラしていたこと。そして……、

「やっぱ、みんなといった海は最高におもしろかったな。ナンパがめんどくさかったけど……。うん……? 海? って……あ! 思い出した。」ナツは夏だったんだ!

友人と一緒に言った思い出の旅行。海水浴を思い出したさくらは、そこから次第に夏のことを思い出していく。先ほどまで連想してはわからない単語が増えていたのに、急に思い出した。

思い出したさくらにはもう先ほどの疑問はなくなっていた。しかし、それと同時に思ってしまうことがある。

「なんで気が付かなかったんだろ……? 夏は暑い。そして暑いから海とかに行つて暑さをしのいでいった? でも、なんで桜が咲いてるんだろ? もう春の季節は終わったの

に！」

それは、なぜ終わったはずの春がもう一度来ているのかということ。そして自分が夏を覚えていなかったことだ。そのことに気が付いた瞬間にさくらのドアが白く輝き始めた。

輝き始めた窓を中心としてだんだんとその光は、さくらの部屋を包み込む。そして、まぶしさからさくらは目を閉じた。この後自分がどうなるのかなってこの時のさくらは何の予想もすることができなかった。

光が弱まり、目を開けるとそこには今まで見ていたものとは全く違うものだらけだった。自分の部屋なんかじゃない。目の前に広がったのはどこか機械じみた研究所のような部屋だった。

「え？ え!?! ちょっとここどここー!?!」

さくらは状況を把握できずに今起きたことに驚くことしかできなかった。そんなさ

くらを少し落ち着かせるかのように、今度はさくらの隣に自分が見たような光が現れた。

時は少し遡りもう一人の少女がこの異変に気が付いたところとなる。さくらよりも遅い時間に起床したある少女は明日、提出する宿題を終わらせるように起床後すぐに机に向かった。

「まったく……。先生たち、宿題を出す量が多すぎるっての……」

昼ということで少し汗をかいた少女の名前は蜚^{はたる}。遊ぶことに集中していたため、夏休みの宿題が終わっていないのだ。それにしても、今日はなんだかいつもより暑い気がする。最近は夏も終わりにかけてきたため、気温が落ち着きを見せ始めていたのだが、これでは夏が逆戻りしたような感じがする。

あらかた宿題の終わりが見え始め、息抜きとして蜚はテレビをつけた。ちようどやっていたのは好きなバラエティー番組だった。その番組に目を通していると、あることに目が行った。

「はあ!? 今日40度もあんのかよ……。昨日は25度くらいだったのに……」

男勝りな口調で蜚は自分の住んでいるところの気温を見る。今までも気温が変化してしまうことはよくあったが、ここまでではなかった。これに目が行ってしまうと単純に学校に行くときの気温が気になってくる。今日ほど暑かったら学校に行くまでに汗をかきそうだ。

携帯を取り出した蜚は、スポーツのことをよく調べているのが分かる予測変換から、明日の天気調べた。

「うわー。やっぱり明日もかあー。おれ汗っかきなのに……」

そんな中、蜚は信じられない情報を目にする。それは昨日の気温が今日の数値と変わらないということ。今までの記憶との相違点を見失ってしまった。

そのことに気が付いた蛍は当然そのサイトを疑う。しかしそのサイトは公式のものでミスであっても昨日のうちに変更していると判断しその選択肢を切り落とした。

「となるとおれの記憶違いってこと？ でもそうとは思えないけど……」

不思議な記憶の違和感を感じ始めた蛍はどうもその感覚をスルーすることができなかった。確かに昨日は過ごしやすい気温だった。なのに1日でここまで気温が変わることも記憶と違う過去のデータが出てくることもおかしい。

考えることを得意としない蛍は、疑問が消えない気持ち悪さから思考を止めなかった。いくら苦手でも、ここまで違和感を放っておくことはできなかったから。

「絶対におかしい。おれにはなんとなくわかる。だけどどうしてこうなったんだろう？

まさか！ 何者かの策略とか!？」

しかし、考えつくのが真つ当なものである、というわけではなかった。若干非日常に興味のある蛍はそんなことを目を輝かせながら考えていた。しかし、それが間違いではないことに気が付くのはもう少し後の話だ。

いまだ、そのことを疑わない蛍は、今の異変よりもそのあとの妄想の旅へと向かっていった。

「それで、急にほかのところ呼び出されて急にこの異変に気が付いたお前に世界を救ってほしいと言われるんだらうな。おれそういうの大好きだからあつたらうれ

しいなあー」

本当に楽しみにしている。まるで子供のように熱くなった自分の頭で考える。

しかし、そのあとにだんだん冷静になってきた頭で自分の考えを否定し始める。

「つて、そんなことないか……。暑くなってきたしアイスでも食べよう」

冷静になった蛭は、室温が今朝から上がる一方だったため、蒸し暑かった。汗をかいた蛭は冷蔵庫にアイスを食べに行こうと自分の部屋を出た。

すると自分は部屋を出たはずなのに一瞬の白い光が見えたと思っただら次に蛭が目を開けると普段は絶対に見えない機械の並んだ部屋にいた。そこには一人の少女が戸惑った表情で蛭のことを見ていた。

アイスを食べに行こうと思っただのに急に知らないところにいる蛭は、目の前に見える少女と同じような表情で互いの顔を見合わせた。

「え……う？ え？ いったい何が起きたのー!？」

わけのわからなくなった蛭はとにかく今はただ叫ぶ事だけしかできなかつた。落ちて着くにはもう少し時間がかかりそうだった。

そんな2人が移動している間にまた1人、この世界の違和感に気が付いた少女がいた。名前を紅葉もみじという。

「なんかいつもと違う気がするわね。まあ、そのうちわかるでしょう」

夏休みに入ったといっても起きる時間と寝る時間を変えない紅葉は最後の日もいつもと変わらない時間に起床する。何かを感じながらもすぐに気が付くと思いきや、いつたんに区切り朝食をとることにした。

いつも朝は昨日の夜ご飯の残りを食べている。ご飯と料理を温めてテーブルに並べ

る。紅葉はいただきますといってできている料理を食べ始める。そんな中、朝の疑問点について考えることにした。

「何かがおかしいわ……。でもいったい何かがおかしいというのかしら？」

違和感を感じながらも、それがどこなのかいまいちよくわかっていない紅葉は、ふと外に目がいく。今までは見ることもなかった、赤い何かが視界に入ったのだ。

紅葉はその赤い何かを目で追う。その形は手のひらのような形の葉っぱだった。……そう、ただの葉っぱ。

「え……。？　なんでそれが今の時期にあるの？」

それを見た紅葉は驚愕する。いくらなんでも8月にそれが見えるのはおかしい。自分の名前と同じ紅葉が家の木を色を赤くしていることは。

今まで感じたことのない違和感の正体と恐怖を感じた紅葉は、逃げるかのようにその思考を続ける。

「今あの紅葉がなっているのはおかしいはず。あれは秋になるものだから。私の名前も秋に生まれたからつけられたんだもの」

紅葉に対する思いは普通の人よりも大きいため何としてでも、この現象が起きた理由を突き止めようとする。その思いが通じこの違和感をしっかりと違和感と感じていた。

朝食どころではなくなってしまう紅葉は食事をとることをやめ自分の部屋へと向

かった。自身のプライベート空間のほうを考えがまとまりやすいからだ。

「いったい何が起こったのかしら？今は間違はなく8月で、夏休み最後の日よね？」

今までの少女たちとは違って今までの季節を理解しているような紅葉は、自分の部屋の本を見てこの現象について調べることにした。

数時間続けて調べ続けていた紅葉はある一つの答えにたどり着いた。それは今までのデータも今の状況と変わらないということ。8月に紅葉があるのは当たり前でむしろ1年中ずつと紅葉があるなんてことが書かれていた。そのことから自分、あるいは自分以外のすべての記憶やデータが書き換えられているということだった。

「本来なら自分を疑うんだらうけど、それでも1人を変えるより世界そのものを変えるといったほうが簡単のはずよね。それに私はそんなことをされるようなことをした覚えはないはずなのだけれど……」

自分の記憶よりも世界がおかしいと判断し始める紅葉には、しつかりとした理由があった。今まで読んできた小説や参考書の書かれていることが全く別のものになっているのだ。凶鑑に至っては、記憶の4分の1くらいに厚さしかない。

それに気が付いた紅葉はそこからとあることに気が付いた。もしかしたら何者かは

人の記憶及び認識を変える何かを使えるということ。

「面白そうね。一体どのような方法を使つてこのような状況を作つたのかしら？ 気になるわ」

そう微笑みながら外の景色を見ていた紅葉の耳に、何かが現れるような音が聞こえた。そして、音のしたほうを見る。そこには白いゲートのような、この世界に生まれて初めて見るようなものがあった。

先ほどから不思議なことが起こり、興味を持ち始めた紅葉はその好奇心から両手を伸ばしゲートをくぐろうとした。

「一体この先のはどんなものが見れるのかしら。少しは期待させてもらうわよ」

そう言葉を呟き紅葉はゲートの中へと歩みを進めた。少しまぶしくなり目をつぶるが、そんなことを気にせずにとんとんと前に進んでいく。

ゲートをくぐり切つたと感じた紅葉はその場で目を開く。そこにあったのは見たこ

ともない……。いや、漫画などの世界でしか見ることのできないと思っていた機械の数々が並んだ未来的な場所に来ていた。

「これは面白いわ！ いったい何が起きているというの！」

未知に遭遇した紅葉はその場にいる困惑している少女とあぐらをかいてぶすつ垂れている少女に気が付かずにきらきらと輝いた眼でその場をじっくりと見て回っていた。

3人が同じ場所に移動したとき、また1人の少女が目を覚ます。

「はあく、また寝落ちしちゃった……。フレンドの人たちに謝っておかなきゃ……」
机の上にあるパソコンに顔をつけて眠っていた少女雪は、やっていたゲームの画面を開きフレンドの人たちにメールを送り謝罪する。目の下に少しクマのできた少女はあまり健康な暮らしをしていないようだった。

起きてすぐにゲームを再開する。基本的に彼女がプレイするのがFPS。常軌を逸してうまいわけではないがちよつとした大会に出ると準決勝くらいまでは進出できる程の力量は持っていた。

「はあく、なんか今日寒くない？ 昨日まで結構過ごしやすかったのに……」

かじかむ手を吐息で温めてからマウスを握る。途端に先ほどまでやる気のない、だらけたような目が真剣な目になる。

対戦が終わりほつと息を吐く。勝敗は一応勝利という形になった。ゲームが終わると先ほど感じた以上の寒さを雪は感じた。

「寒いよ……。一体どうなってるの？」

現在の寒さをおかしく感じた雪は部屋にあるエアコンをつけて暖をとる。この時期に暖房を使うことになるとは思ってもみなかった。さすがにおかしいと感じた雪が次にとつた行動は机から離れ窓から外を見ることだった。

少しずつ暖かくなってきた部屋で窓を見ようとすでに曇っていたため、仕方なく窓

を開けることにした。するとそこには普通なら信じることのできないことが起こっていた。

「なんで雪が降ってるの？　今は確かナツよね？」

今の時期に雪が降っているのは明らかにおかしいと感じた雪は、この状況をとてつもない超常現象だと思っていた。どんなに考えても答えの出ない問題を目の当たりにして、現実逃避のごとくゲームを再開する雪。

こんなことを経験した記憶はない。むしろなんで寒くなってしまったのか、どうせなら暑くもなく寒くもない春か秋にしてほしいと雪は思っていた。

「まあ、それでもゲームをやることには変わらないけどね。はい、連続キル達成」

どんどんゲームを続けていく雪。するとゲームの中に変な裂け目のようなものを見た。普段よく使っているマップにこんなところはなかったはずだと思った雪はその場所に向かってみる。

そんな行動を不審に思ったのか、仲間から何をしているかと聞かれる。雪はみんなに報告をしてそれでも進むことをやめなかった。

「ほかの人には見えてない？　じゃあいったいこれは……？」

何かわからないものがあるこのマップに少しの違和感を感じる雪は、この裂け目がシステム上に出来たモノではないことを察した。それはほかのプレイヤーの反応からわ

かることだ。あとは自分のパソコンがおかしいと考えるが、それもどうやら違うみたいだ。はつきりと裂け目は見える。ディスプレイにも問題はない。

もう何が何だか分からなくなった雪はとにかくその裂け目にあたってみることにした。表示できていないだけなら何も問題はないはずと思い、思い切って進んでいく。

「問題はないはずだね？　急にパソコン壊れたりなんてしないよね？」

動いている最中少し不安になるがそれでも進むことはやめなかった。結果、裂け目に触れた瞬間パソコンの画面は白く輝く。エラーとも出ないその現象に雪は戸惑いを隠せない。

キーボードを何回か打ち込み反応があるかどうかを確かめるがモニターが見えないため判断できない。再起動しようと電源のスイッチを押すがそれでも白い光は消えなかった。

「一体どうなってるの？　朝からずっとわからないことだらけよ……」

雪はそう言いながらパソコンの画面に触れた。すると光は強くなり次第に雪のことを包み込もうとする。何が何だか分からなくなった雪はとりあえずパソコンから手を離すがそれでも光は止まらなかった。

まぶしさのあまり目を強くつぶる雪。何もわからない恐怖心からか腕で顔を覆っていた。

「なんなの何なの何なの!! 何が起きてるっていうのよー!!」

そう叫びながら、今起きている現象を頑張つて理解しようとするが、突然すぎることの連続で頭の処理が追いつかない。しかしそんな雪のことなど気にもせず光は、どんどんと雪の体を包み込み続け、全身が白い光で覆われた。

すると雪は少しの浮遊感を感じそれが終わるのを体感したら、そこからようやく目を開く。そこにはゲームをする雪にとつて宝の山ともいえるマシンの数々が置いてあった。

「何!!!? なんでこんなところにあたしがいるの!!? で、この機械は何!!!」

ここにきてようやくわからないことが口から出る。普段よりも高いテンションで次々にわからないことを誰に聞くでもなく訊ねるがもちろん答えは返ってこない。

ようやく落ち着けた雪を出迎えたのは、この部屋にいる別の3人の驚いたような視線だった。ほかの人がいることを理解した雪は顔を赤くしてその場にうづくまった。

今日は何もわからない事ばかりで困惑しているが、これからこの4人の少女は信じられない事実を伝えられる。今はそんな彼女らのささやかな休息の時間だった。

呼ばれたワケ

急に視界が白くなったかと思うと突然知らない風景のところに行った。私は当然というべきなのか驚いていた。さらには驚いている時に隣が突然光りだすとそこにはまた自分と同じような疑問を持つている女の子が現れた。髪の色が茶色で見るからに運動が得意そうな女の子。それからというもの同じように本を持ったメガネをかけた女の子と白髪の少し不健康そうな女の子が同じようにやって来た。

何がおだかよくわかっていない様子の3人に私自身も今の状況がどういう状況なのかよくわかっていないけどとりあえず同じ境遇に立っている3人に向けて話しかける。「えつと……。とりあえず自己紹介しない？ 私の名前はさくら。今がどんな状況か分からないけどとりあえずよろしく」

私は名前を他の3人に教えた。どんな状況か分からない以上ここにいる人たちとは友好関係にあったほうがいい。それになんかよく分からないけどこの3人とは仲良くなれる気がした。

私が自己紹介をすると今度は茶髪の女の子が自己紹介を始めようとして口を開く。「おれの名前は蛍だ。こんな口調だけどれつきとした女だからな。一応運動が得意だ。

いきなり何が起きたのか分からないけどとりあえずしばらくはよろしく」

蛍と名乗った少女は自分の得意なことを交えて話してくれた。少し男勝りな喋り方だけど確かに女の子だね。運動は私は得意とも苦手とも言えないから少し羨ましい。蛍ちゃんが自己紹介をし終わると今度はメガネをかけた見た目はザ・文学少女という見た目の少女が話し始める。

「私の名前は紅葉よ。趣味は読書。正直ここに来た理由はわからないけど8月の時点で紅葉が始まったことを考えるとそれ関係ではないかと思ってるわ。それと、そこでずっとうずくまってるあなたもこっちに来なさい」

紅葉という名前の少女は蛍ちゃんと同じように自己紹介を始め、そしてここに来た時がテンションの高かった白髪の少女にこちら側に来るようにと語りかけた。私達を見て急にうずくまるなんてどうしたんだろう？

紅葉ちゃんに言われると白髪の女の子はドキツとしたのか、少しびくりとした後恐る恐る私たちの方を見る。うずくまっていた件もそうだけど私たちは知らず識らずに何かしていたのかな？

「えつと……。ごめんなさい。あたしの名前は雪。趣味は……。ゲームです。あまり話をするのは苦手だったから少し恥ずかしくて……」

もじもじしながらも自己紹介をしてくれた少女の名前は雪というらしい。頬を赤ら

めながら話しているその様子で恥ずかしがり屋なのはよくわかった。

ここにいるのは私ことさくらと、茶髪で運動が得意な蛍ちゃん、読書家である程度今の状況に理由が考えついている紅葉ちゃん、最後にゲームが趣味の恥ずかしがり屋の雪ちゃん。この4人がこの研究所のような場所にいる。一体これから何があるのだろうか……。

「つて、紅葉ちゃんに何かわかってるの!？」

私はある程度予想がつくと言っていた紅葉ちゃんの発言を思い出して、そのことについて聞いて見ることにした。今は圧倒的に情報が少ない。少しでも情報の共有が大事だから。

私に急に呼ばれたからなのか紅葉ちゃんは少し不思議な顔をして何かを悩むようにしてから私の言ったことについて話し始める。

「……ちゃん? まあいいわ。まず、8月にもかかわらずに葉が赤くなり始めてたじゃない? それで少し疑問に思ったことがあるのよ。季節が突然なんの脈絡もなく入れ替わったんじゃないかって」

「ちよつと待てよ。急に気温が高くなったの間違いじゃないか? 朝起きてから宿題をやつてたら汗だくになっちまったんだから」

「……違うよ……。雪が降つてた……。明らかにおかしいっていうのはその通りだけ

ど、確かにあたしは雪を見たよ」

紅葉ちゃんの言ったことに蛍ちゃんと雪ちゃんが反論する。いきなり話が噛み合わなくなってしまう。かく言う私も朝起きたら急に桜が咲いてて紅葉も気温上昇も積雪も見ることにはなかつたけど。

私たち他の3人の話を聞いて紅葉ちゃんはまたもや考えるそぶりを見せる。今の話を総合してもう一度考え直しているようだ。私以外の2人も考えている紅葉ちゃんのことを考えてか静かに紅葉ちゃんが答えを出すのを待っていた。

「ごめんなさい。少し認識が異なってみたいね。今の話を聞くと、今まで一緒だった季節がなんらかの影響で1つずつに分けられてしまったと私は考えたの」

確かに少しそんなことを考えてしまった。しかしそんなことはあり得ないと考えを切ってしまった私の考えを代弁するかのように口にした。

「何もなんの根拠がないワケじゃないの。私の持っている図鑑がね、明らかに記憶の4分の1しかなかったのよ。今の話で引っかけたそれがなくなつたわ」

続けて紅葉ちゃんは自分の考えをどんどんと口にする。4分の1という数字からある程度の考えができるということは何かに慣れているからだろうか？

紅葉ちゃんの話の話を聞いていると研究所のドアらしき場所が開いた。そして入って来る白衣を着た男性とそれについて来る青髪のポニーテールの少女が入って来た。入っ

て来た男性は私たちに向けて話をし始めた。

「これは驚いた。そこまでの結論にもうたどり着いているのか。確かに彼女の言っていることは正しい。君たちはもともと1つだった世界が4つの季節ごとに別れてしまった世界からここに来た。……いや、僕が呼んだんだ」

急に今の状況の説明を始めた男性はどんどんと私たちの方に近寄って来る。私は今の話になるフレーズが出て来たところに気がつく。

それは男の人が私たちを呼んだというところ。世界が4つに別れたなんて言われてもそんなに早くに理解するのは難しい。だけど呼んだと言われれば何か私たちに用があるということになる。

「呼んだって、どういうことですか？」

「ちよつと待てさくら。おい、あんた。いったい誰だ？ おれたちに何が用があるのか？」

下手になつて話を聞こうとしている私を止めて蛍ちゃんが男性に向けて高圧的に話を聞こうとしている。理由を聞くの遠回りをしてしまうことは話を理解するのに無駄なことだと判断しなのか蛍ちゃんやんは男性を睨みつけて要件を聞く。

いきなり雰囲気が変わった蛍ちゃんやんに圧倒されてか先ほどまで軽い足取りでこちらに歩いて来ていた白衣の男性が立ち止まり、その後ろにいた青が身の女性もそれと同時に

に立ち止まる。

「あ……ああ、まだ名前を言っていないかったね。僕の名前はシズン。こここのラボの責任者さ。とは言ってもここには僕と助手の時雨くんだけだがね」

「時雨……。シズン博士の助手……」

「えっと。僕が君たちを呼んだ理由だよ。それは今のまま4つの世界を分離させているとそれぞれの世界が破滅してしまうからそれを食い止めるためにこの現状を違和感に感じられた君たちをこの空間に呼んだんだ」

今の現状に対してこの説明ならすべてに納得がいく……。でもいきなり世界が分離したなんて言われてもすぐにはい、そうですか。となるわけではなかった。

それからシズン博士と名乗った男性の話を要約すると、私たちは異常な光景を異常を認識することができて、それはそれぞれの世界に1人しかいなかったそう。そして元の世界の時の記憶もあつたから呼ばれたみたい。

今までの話を黙って聞いていた雪ちゃんがシズン博士に気になったことを尋ねた。

「……えっと、それはいいんですけど結局は何をすればいいんですか……?」

最初の蛍ちゃんの問いかけにもあつたこと。だけど呼ばれた理由だけが気になってしまい今までそのことを忘れていた。

するとシズン博士は腕を組み少し考えるようにしている。その後ろにいる時雨ちゃ

んはさつきからじつと立ったまんまだ。ちよつと怖い……。

「えつとね。僕が君たちをこの場所に呼んだ理由は話したよね？」

今までの話を理解しているかを尋ねるかのようにシズン博士は私たちに語りかけてきた。最初にこれと似た考えをしていた紅葉ちゃんと今までの話を黙って聞いていた雪ちゃんを縦に振る。私も完全に理解したわけじゃないけど呼ばれた理由に関しては理解できたつもり。問題は先ほどから少し厳しい顔をしていた蛍ちゃん……。さつきの威勢はどこに行つたの……？

それでもある程度は理解していたみたいで蛍ちゃんはシズン博士に大丈夫だということ伝えた。

「じゃあ、そこからなんでこのような事態が起きてしまったのかということをお話すね。……もともと1つだけだった世界の中に4人の大人たちがいたんだ。そしてそれぞれに好きな季節があつた。研究の結果それを分断することを可能にした彼らは、科学と魔法の力で4つの季節に分けることに成功した」

世界が4つに分かれてしまったことの理由を教えてくださいましたシズン博士の説明は初めて聞いただけじゃ本当なのかと疑ってしまう内容だった。いきなり魔法だの言われても話についていくのがやつとの状態なのに理解が追い付かなくなっちゃう……。それにそのどこが悪いかが今の説明だとわからない。

多分雪ちゃんも蛍ちゃんも私と同じことを思っている。蛍ちゃんは首を傾げ、雪ちゃんは「……何かを考えている様子だった。かくいう私も同じ状態でどうしてそれを直さないといけないのかが分からなかった。」

「……君たちは、いや紅葉さん以外はまだわかっていないようだね。季節が1つだけになつてしまふとその世界は破綻してしまふんだ」

「またもやいきなり説明される。なんで？ 疑問が尽きない……。季節が1つだけならそれが好きな人たちにとってはいいことだらけなんじゃないの？」

「きつと私の思っていることは話を聞いたらみんなが思うことなんだと思う。いまだにほかの2人も疑問が解決していかないみたい。だけどそれについてしっかりと理解している人がいた。」

「1年は12か月。そして4つの季節があつて生態系が成り立っているのよ。本来秋にお米が収穫されるけどそれは雪などで水があつて時間をかけて作るもの。だけど秋に雪は降らない……。野菜だつてそう。それに魚だつて。そしたら食料がなくなつていく未来しかないわ」

「言われて初めて気が付いた。そうだ。今まで4つの季節があつたからこそ生態系が崩れなかった。それは確かにそうだ。季節が1つしかなくなると……本来の時期でとれるものがずれたり、採れなくなつてしまふ。そうすれば世界中に被害が起きてしま

う。

紅葉ちゃんの言ったことをシズン博士は黙って聞いていた。そして話し終わると同時にまた口を開く。

「そこまでしつかりと考えつくとはね……。それで、君たちには異常を認識すると同時にある特性を持っていることが分かったんだ。……いや、むしろそれを持っているからこそ認識できたって可能性が高いか」

……これってあれだよな？ 君は不思議な力を持っている。だから世界のために戦ってくれないかの奴だよな？ あれ私好きじゃないんだよな。急に言われてもついていけないわけじゃないじゃん。あれ。なんでいきなり戦闘こなしちゃってるの？ っとなるから。

そんな私とは裏腹にシズン博士の言葉を聞いた瞬間さつきまで首をかしげていた蛍ちゃんが目をキラキラさせながらシズン博士に言い寄った。……だからさつきのかっこよかつた蛍ちゃんはどこに行つたのよ？

「それっておれたちには不思議な力があるってことか!? それで、悪と戦うつてやつ!」
うん。蛍ちゃんの目は明らかにテンションの上がつている子供のような目だ。憧れていたんだろなあ。

蛍ちゃんに言い寄られているシズン博士は少し苦笑いをしながら蛍ちゃんのことを

見ながら言ってきたことについて答えた。

「そつそうだよ。もちろん強制じゃないし命の危険があるから断つてくれてもかまわない。まあ受けてくれたほうがうれしいけどね。あと、戦闘面ならこつちである程度サポートするよ。疑似戦闘とか武器の準備だつて」

あ、私の嫌いな部分はちゃんとカバーしてくれるんだ。それなら安心かな。

……けど気になる部分があるのは仕方ないよね。だつて……、
「命の危険つて……、いったいどれほどなんですか……？」

私が思っていたことを雪ちゃんがシズン博士に聞いていた。命の危険といわれて素直にうなずけるわけがないのはわかっているはず。それにどれだけリスクがあるのかを聞いてみないと判断することができない。

「無責任なこととは言えないからしつかりと説明するけど、君たちがやってくれる場合戦闘時はこちらの支給する戦闘服に着替えてもらう。強度は新幹線に轢かれても死なないようにはなっている。その分痛みは感じるけどね。それに戦闘に関しては時雨が教えてくれるからそれなりに戦えるようにはなる。だから油断しなければ死にはしない。それに瀕死状態になったら自動的にここに転送されるようにしてあるし、その場合の医療もそろっているから命を落とす確率は1割未満といったところかな」

またサポートはしてくれらしい。正直私はやってもいいと思った。それがみんな

のためになるのなら。けど多分私一人じゃどうしようもないんだと思う。

「おれはやつてもいいぜ。なんか面白そうじゃん。それにしつかりとサポートしてくれるんだろ？ だつたらうちはやるよ」

そんなことを私が考えていると螢ちゃんがシズン博士に参加することを申し出た。

「あら、それは私もよ。未だ見たことのない世界が待つてるんですもの、未知ほど興味をそそるものはないわ。だから私もやるわ」

同じく紅葉ちゃんも螢ちゃんに続いてこの作戦に参加することを明かす。

「……けど。それはあたしたちじゃなくてもいいんじゃないんですか？ いきなり言われたあたしたちがやる必要が分かりません……」

次に話したのは雪ちゃん。ちよつと怖がりながら雪ちゃんはシズン博士に自分の考えを言った。確かにいきなり言われた私たちがやるようなことではない。やってもいいかと思つてもそれだけは考えてしまう。

「確かに、君たちは何にも関係ない一般人だ。いきなり言われても戸惑うし、参加する義理はないと思う。僕ができるのは見ることでできない世界を見せることと、戦闘をサポートすることしかできない。それなりの報酬も出すつもりだけど、ものでつるついでうのはあまりしたくない」

その言葉を聞いていろいろ考えてくれてるんだなあ、シズン博士も。と思つた。そ

れだけ事態が大変なことだということも少しだけ理解できた気がする。

だから私は雪ちゃんに声をかける。

「ねえ、雪ちゃん。最初だけ少しやってみない？こんな機会めつたにないし、それにもしかしたらやつてみたら以外に自分に合つてたりするかもしれないからさ」

私は雪ちゃんを誘つてみることにした。きつと、この4人が一緒にいないといけない気がしてみてられなくなつちやつた。

「博士。聞きたいことがあります。銃つてありますか？」

私の言葉を聞いた後、雪ちゃんがシズン博士にそんなことを聞いた。さつきまでの少しくらい雪ちゃんとは別人になつたみたいにはキハキシヤベつている。

「もちろん。武器に関しては一通り揃えてある」

雪ちゃんの問いかけに博士はすぐに答える。きつと今を逃したら雪ちゃんが一緒になつて参加してくれないと思つたのだろう。

「なら、少しだけならやつてもいいですよ。その……、さくらに免じて、ですが……」

顔を赤らめながら雪ちゃんが私のことを見てきた。……うれしい。あつて間もないのに少し恥ずかしがり屋の雪ちゃんが私のことを名前で呼んでくれた。そしてやつてもいいつて言つてくれた。思わず私は雪ちゃんに抱き着いた。

雪ちゃんは先ほどよりも顔を赤くしている。可愛い……。

「私もやりませう。このみんなともつと一緒になりたいから」

そして抱き着いたまま私はそう宣言した。今は、もつとみんなと一緒にいたい。強くそう思えるからこそ、そう決断した。

「……っ！ いいのかい!？」 ありがとう。じゃあ少し部屋を移そう。武器とかの適性をみる検査をしたい。今は大丈夫かな？」

私が参加を表明したらシズン博士は喜び早速行動を移そうとした。もちろん私たちに断る理由がないため、

「わかりました。みんなもそれでいいよね？」

先に私が答え、蛍ちゃんに紅葉ちゃん、そして雪ちゃんに訊ねると3人とも首を縦に振ってくれた。

「ありがとう。じゃあ僕は準備をしに行くから計測場所に4人を案内してくれるかな時雨君」

「わかりました。では皆さん、ついてきてください」

博士にそう言われたら先ほどまで黙って後ろに立っていた時雨ちゃんがその場所に案内してくれる。

私たちは計測場所に向かうべく今までいた場所から飛び出した。

それはこれから起きる未知なる冒険の始まりの1歩だった。

適性検査

私たちが時雨ちゃんという女の子に連れていかれたのは病院にあるCTのようなものがある部屋だった。きつとここがシズン博士の言っていた計測場所なんだろう。そしてガラス張りされている壁の向こうには先ほど別れた博士がいた。博士のいる部屋はモニターが数多くあり、そのモニターの前にはいくつかのコンピュータを操作する機械が並んでいた。

そうやって私が部屋を観察していると、興奮が抑えきれなくなった蛍ちゃんがこの計測部屋にきて初めて声を発した。

「ここですれば何を計測できるんだ!? おれは何をすればいいんだ!」

かなり興奮が高まっている蛍ちゃんはそのテンションのまま時雨ちゃんにこれから何をやるのかを聞いていた。確かに計測をするという話は聞こえていたので知っていたけど、どういふのを計測するかは聞いていなかった。

私の疑問を蛍ちゃんが代弁してくれたため別の部屋にいる博士がマイクのようなものをもってそこに話しかける。

「まずやってもらうのはそのままの服装でいいから一人ずつそこにある機械に寝ていて

ほしい。そのあとあるスキャン作業が終わったら一度は終わりだ。あとはこっちに結果が出てくるから終わったら時雨君にここに連れてきてもらって」

これからやる一通りの流れをシズン博士は私たちに教えてくれた。すると一番やる気のある蛍ちゃんがかんかんとして機械のほうに近づいた。

そして私たちのほうに振り向いて笑顔で口を開く。

「なあ、先におれがやっていいか？ 本当に興味あるんだよ！頼む」

目を輝かせて私たちに行っていく蛍ちゃんは本当に早くやりましたそうにしていた。私としては先でも後でも構わないからいいけどほかの人たちはどうなんだろう？

「……構わないわ。結局はみんなできることなんだし、早くやったところで結果は変わらないはずだと思うから」

「……右に同じ。あたしも構わない。さくらは？」

「私もいいよ。蛍ちゃんのそんな顔見たら自分が先に、なんて言えないよ」

どうやらみんな蛍ちゃんに順番を譲る気だったようでそれをそれぞれの言葉でその旨を伝えた。みんなも多分私と同じようなんだろう。だってあんな目を輝かせていた蛍ちゃんを見たら……ね？

自分が先にできることが分かった蛍ちゃんは時雨ちゃんのところに行って自分が先にやることを告げた。

「先は俺ってことになった！ よろしく頼む」

そういつて蛍ちゃんは計測器のほうに寝転がった。すると今度はまた博士が私たちに話すためマイクから声を発した。

「じゃあ先にやるのは蛍くんだね。じゃあこれから始めるから少し目をつむっててくれないかな。少し光が強いから」

博士はこの機械で測定する方法として注意する点を先に教えてくれた。そして蛍ちゃんはその指示通りに目をつむった。

博士が蛍ちゃんの目が閉じたことを確認して機械の操作を始めた。すると眠っている蛍ちゃんのところを輪の中心を通り3回ほど通り、動きが止まった。

「はい。もういいよ。蛍くん。次の人は横になつて待つてて」

止まった後にすぐに博士の放送がかかる。すると寝ていた蛍ちゃんは起き上がりその機械から降りた。

「もう終わりなのか。じゃあ次はだれがやるんだ？」

そして首などを回しながら3人いるほうに歩いてくる。

「では、次は私が行くわ。いいかしら？」

次に行こうといったのは紅葉ちゃんだった。確かに紅葉ちゃんは蛍ちゃんの次に参加したいといっていたからやる気はあるんだろう。確認のために私と雪ちゃんに聞い

てきた。

「私としては問題はないよ。雪ちゃんは？」

「あたしも問題はない。むしろ最後でいいよ」

私たちの答えを聞いた紅葉ちゃんは口角が少し上がった。

「そう。じゃあ先にやらせてもらおうわね」

私と雪ちゃんにそう言い残し、入れ替わりで蛍ちゃんと場所が変わる。今度は紅葉ちゃんが計測器の上に寝転がって計測の開始を待つ。

紅葉ちゃんが寝ているのを確認した博士はまた放送を入れる。

「それじゃあ、さっきと同じだから目を閉じてもらって少し待っててね」

そうして紅葉ちゃんも目を閉じてその間に紅葉ちゃんを中心に輪っかがまた3回ほど往復していた。またすぐに終わりそれを確認した紅葉ちゃんが立ち上がり蛍ちゃんと同じように戻ってきた。

「じゃあ次は私が行くね。雪ちゃん」

「うん。先どうぞ。さくら」

先ほど最後でいいと聞いていた雪ちゃんの言葉を聞いて私が譲ったらいつまでたつても決まらない気がして私が先に名乗り出た。雪ちゃんも大丈夫だったようで問題なく話は進んでいった。

私も紅葉ちゃんたちと同じように計測器に眠りながら機械が動くのを待った。少し待つと機械の動く音が自分に近づいたり離れたりする。その間も私は目をつむったまま計測が終わるのを待った。

今までと同じようにすぐに検査が終わり私は寝ていたところから起き上がりみんなの待つている場所に戻った。

私が戻ってくると次は雪ちゃんの番。もう最後だから私と入れ違いに検査をしに向かった。

雪ちゃんもこれまでの私たちと同じように装置に寝て、目をつむりただただ計測が終わるのを待っていた。本当にすぐに終わり雪ちゃんもちよつとだけ駆け足気味に私たちのところに戻ってくる。

「なんか、何もしてないから実感わかないね……」

私は先ほど体験して思ったことをそのまま口にしてみることにした。本当に何もせず待っていたから今ので何が分かるのかが全く分からなかった。

そう話していると、後ろから時雨ちゃんが話しかけてきた。

「それでは、博士の待つている部屋に向かいましょう。結果がそこで見ることができま
す」

どうやらここにおいてももう何もできないらしい。そのため結果が分かる部屋に行く

事になった。その話を聞いた瞬間結果に余程興味があるのか蛍ちゃんもまたもや目を光らせ時雨ちゃんについていく。

私たちもそのあとを追い、博士のいる機械がびつしりと並んで、先ほどの部屋が見える場所についた。

「博士、連れてきました」

時雨ちゃんはいった瞬間に報告を博士に入れる。……時雨ちゃんの話し方に抑揚がないから少し違和感があるけどここまで来て変わらないからずっとこのままの話し方なのだろうと私は思った。

入ってきた私たちに時雨ちゃんの声で気が付いたみたいで博士がこちらを見てくる。「お疲れ様。つて言っても何見してないから何が起きているのかよくわかってないと思うけど、今の時間で君たちに向いている攻撃方法を見つけていることが出来たんだ。早速だけど見てくれるかな」

私たちにそう言って博士は目の前にあるモニターを見せてくる。それを私たちは確認した。

「まず最初に計測をした蛍くんだけだ。一番いいのが筋力値と瞬発力だね」

博士は出ている結果から私たちの力を数値化して特質した面を教えてくれている。それが五角形のグラフになってモニターに映し出されている。そしてその結果が一番気になっていた蛍ちゃんはそれをまじまじと見ていた。

「それでおれに向いている武器って何なんだ!?!」

蛍ちゃんはかなり興奮しているみたいでかなり食い気味に話せにその話の続きを訊ねた。

テンションの上がっている蛍ちゃんに驚きながらも博士はそのあとの言葉を続ける。

「そうだね。ここからだ、筋力値があるから大剣とか、大斧とかが向いていると思う。多分速さを求めるより蛍くんの場合は一撃一撃を重くしていったほうが戦いやすいと思うよ」

数値を見ただけでいろいろと判断が付いているようですらうと言っただけのける博士。

一応、今まで普通に生活していた女の子なのにいきなり大斧や大剣を使いこなせるということを言われている蛍ちゃんは無茶な言葉なのに対して目をキラキラさせながら話を聞いていた。

「いいじゃんその武器！ おれは好きだぜ！」

博士の提案の武器に関して自分の思っている部分を蛍ちゃんは言った。武器をついている蛍ちゃんを想像するとしつくりくるから少し不思議な感じ……。

今までの話の中で蛍ちゃんの武器に関しては大方決まっているようなものだった。

「じゃあ、蛍くんはある程度の武器に関しては決定ということでもいいね。今度は紅葉さんのほうなんだけど……」

この話自体、蛍ちゃんだけに関係しているものではなく私たちにだって関係のあるものだ。だから博士は次に計測をした紅葉ちゃんのほうを向き少し困った様子で話しかける。

そんな様子の博士に疑問を感じた紅葉ちゃんは気になった部分に関してすぐに訪ねる。

「何か問題でもありましたか？」

今の様子だと何かがあったように感じたのは紅葉ちゃんも私も同じだった。今も難しい顔をしている博士はいったい何を見つけたのだろうと気になる。

ただ問題があるという私たちの考えは間違っていたようだった。そのことについて博士の説明が入る。

「いや問題ではないんだ。ただ、少し習得するのに時間がかかりそうなものがあつたん

だ」

大体は全くの知識がないから時間がかかると思うけど、それは博士も織り込み済みで話しているのだろう。そういった考えの中でも時間がかかるといつているからにはものすごい時間が必要なものなのだろうということも分かった。

いまだ正体のわからないことがもどかしいようで紅葉ちゃんはストレートにそれが何なのかを聞く。

「それは……？」

博士はモニターに移されているグラフを私たちにを見せてくれる。そこにはグラフがあり、魔法と書かれたところを指さして私たちに説明をしてくれる。

「魔法特性が4人の中でもダントツでいい。そして次にいいのが俊敏性かな。それで難しいといったのは多分かかると思うけど魔法のことについてだ」

いまだ私や雪ちゃんのデータは見せられてないけど、比較として蛍ちゃんとグラフを比べると申し訳程度にある蛍ちゃんのグラフ値は違い、紅葉ちゃんの魔法の部分はとても大きく伸びていた。

ただ、単純に魔法といわれても何が何だかわからない。それは、紅葉ちゃんも同じだった。

「魔法といいますが、いったいどんなものなのでしょう？」

この世界には魔法については様々な作品で定義されている。魔法陣を書くものだったり、呪文を唱えるものだったり。逆に多くの定義があると本来の魔法はどういうものなのかはよくはわからない。

「その疑問はもつともだね。魔法というのはいろいろな解釈があるとは思うけど、素質……魔法適性がある人がその魔法に関係する呪文を読んで頭の中で魔法陣を想像すると発動することができるものだ。これを使える人はある程度限られてはいる」

博士はそんな疑問を持ってしている紅葉ちゃんに対し、現実の魔法の定義を教える。漫画やアニメみたいに見せるような魔法の使い方ではないけど、きつと一番効率的で大変な使い方なんだろう。

それはなぜなら魔法陣を詳しく理解してそして呪文までも覚えなさいといけないう。こういう場合難しい魔法の呪文は長いし、覚えるだけで苦労しそうだった。

「それは本のようなものがあるのですか？」

そう私が考えていると意外に簡単そうに紅葉ちゃんは博士に魔法の知識をえようとしていた。

紅葉ちゃんの問いかけを少し驚きながら博士は聞いていた。紅葉ちゃんの言ったその言葉は間接的に魔法を使うことを決めているような言葉だったからだろう。

「もちろんあるが、魔法を覚えるより俊敏性を生かした戦闘スタイルのほうがいいと思

うよ」

そう言って難しい魔法から遠ざけるかのように次に次に目立っているグラフの部分を指さしていた。だけどそのグラフは魔法ほど突き抜けているわけではない。

自分のことを甘く見られているのかと思っただろう紅葉ちゃんは冷静な状態を維持していたけどむきになっているようだった。

「私を見くびらないでください。しっかりとした見本があるのならそれを使うことができるのは当たり前です。私に魔法を教えてください」

真剣な目で紅葉ちゃんはシズン博士のことを見る。その瞳の中には魔法を使うという確かな覚悟があった。その勢いにやられたシズン博士は折れることにした。

「……わかった。じゃあ後でその初歩の本を渡そう」

これで紅葉ちゃんが魔法を使うことが決定した。博士がそう言ってくれた瞬間紅葉ちゃんは嬉しそうに笑顔を見せてくれた。

「ありがとうございます」

そして蛍ちゃん、紅葉ちゃんの後を続けるように博士は次に雪ちゃんに話しかける。

「では次はえつと……、雪くんだね」

ただ、もう雪ちゃんは使いたい武器が決まっているみたいなんだけどそれでも今回の計測したデータを見せてくれる。

雪ちゃんは相変わらず人見知りを発揮して少し言葉が突っかかってしまうがそれでもその計測されたデータのほうに視線を向けていた。

「はっはい……」

つと元気に返事をした雪ちゃんだったがそこで博士はあることを思い出したみたい。

「とはいっても君には使いたい武器があるんだよね」

そう。雪ちゃんはどうしても使いたい武器があった。それを使うことを条件としてこのメンバーに入ったようなものだからその武器が使えないときつと出て行っちゃうだろう。

「ここまでの流れで雪ちゃんの使いたい武器が変わるなんてことはなく素直に雪ちゃんに使いたい武器をこたえる。」

「銃を使いたいと思っっています」

銃の話になったとたん急に人格が変わったようにはきはきとしゃべるようになった雪ちゃん。どうやら銃関連の話になるとこういう感じになるみたい。

そしてそのことを再確認した博士はモニターのほうを見ながら雪ちゃんに話しかける。

「先ほどの計測の結果を見ると、完全に使いこなすのは難しいと思うけど一番合っているのは銃装備になると思う」

できるということを聞いてすぐにうれしそうな顔をすると思われた雪ちゃんの表情がいまだすぐれなかった。でいるといわれたのになんでだろうと思っているとそれはすぐに雪ちゃんの口から伝えられた。

「……何かが足りませんか？」

確かゲームをよくやっているということを聞いていたからそれみたいに使いたかったんだろうと直感で私はそう思った。今までたとえゲームの中でもイメージ通りに使えていた武器が使えなくなるのは嫌な感じがするのはなんとなくわかる。……え？なんで私ゲームをあまりやらないはずなのにこういう気持ちがかかるんだろう？

私がそんなことを思っている間も話の流れは続いていく。雪ちゃんの問いかけに博士は隠すことも遠回りもせず話を進める。

「筋力が少し足りてないかな。銃を撃った反動に耐えられないと完全には使いこなせないよ」

確かに銃には反動がある。家に引きこもってゲームをしていたみたいだから筋力が落ちてしまっているのはなんとなくわかる。そこまで考えた点で博士の先ほどの言葉だった。

しかし、いくら使いこなせないといわれても銃に対してプライドのある雪ちゃんは銃を使うことを諦めなかった。

「……そのトレーニングもサポートしてくれるんですね」

私もそうだけど、いろいろとサポートしてくれるということで私たちは戦うということを決めた。その中でも使いこなすためのトレーニングがあるかどうかを確認のため雪ちゃん博士に聞いたのだろう。私もそういうことは聞いておきたいからちようどよかった。

そして帰ってきた言葉も私たちにとってはありがたいものだった。

「もちろん。特に視力の部分がいいし心拍数が落ち着いているようだから超長距離狙撃が向いていると思うよ」

これで心置きなく武器を使うための練習を行うことができる。そういうことが分かるようにしてくれた雪ちゃんには感謝しないと。

そのことが分かった瞬間いろいろと考えていたのであろう雪ちゃんが口を開いた。

「わかりました。メインにスナイパーライフル。サブでハンドガンを使わせてもらいます」

今までの会話の流れから自分の武器を大まかにどういうものを使うのかを決めていたみたいだった。超長距離がいいって言ってたしスナイパーとして後ろから援護してくれたら結構やりやすいかも。

雪ちゃんの使う武器の提案にシズン博士は何の異論もないみたい。

「うん。それがいいと思うね。ある程度の種類は用意してあるから、好きに選んでね」
すぐに博士は雪ちゃんのその発言を受け入れた。さすが銃に関係しているゲームをやっているだけあって状況からの武器の選択はすぐに思いつくみたいだった。

博士からお墨付きをもらった雪ちゃんは先ほどの熱心な反応を見せずに人見知りの雰囲気に戻っていた。

「……了解」

先ほどまでの自分の行動をおぼいだしているのだとは思うけど雪ちゃんの顔が赤くなっていた。照れているみたいだけど、どうやらそれだけじゃないみたい。興奮？かな銃を持つことができるのがそんなにうれしいみたいだった。

そして雪ちゃんの使用する武器も決まり残るはあと私だけとなった。蛍ちゃんは近接戦闘で、紅葉ちゃんは魔法で攻撃。雪ちゃんは超長距離狙撃で援護……。あれ？私が必要？

「……………最後にさくらくんだけ……………」

そんな考えをしていたからなのか博士から私にとってあまりいい響きでない言葉が発せられる事に私はまだ気が付いていなかった。

少し重苦しい雰囲気になったことから異常があつたのかと私は不安になった。紅葉ちゃんの魔法を打ち明ける時とは違うもつと驚いた表情だった。

「はい。なんかあつたんですか？」

ただ何に驚いているのかは私にはわからない。だから私は博士に聞いてみることにした。すると帰ってきた言葉は……、

「それが……。ほかの3人と比べて特に特質したところがないんだ」

もう私はいらないのでといつているように聞こえた。まだ何もしていないのに。でも、そんな言葉を聞いても私は不思議と落ち着いていた。

「え……？それって私は全く使い物にならないということですか？」

もつと取り乱すかと思つたけど冷静に博士の言葉の意味を聞いてみる。本当に私自身は無意味にここに呼ばれたのかを確かめるために……。

戦う準備 その1

私はこの3人とは違って何もできない。そんな風に言われた気がした。でも、それが間違いであってほしいとも同時に思った。どういう意味なのかを博士に尋ねると、それはすぐに返ってきた。

「いや、そういうわけではない。普通の人たちと比べるとはるかに能力はある。……けどほかの3人のようにどこかが特出していいところが見当たらなかったんだ。これは極めて例外的なことだよ」

一般人と比べると私は異常な力を持っているらしい。運動能力も勉強も人並みだ。たはずの私が。だとすると先ほど言ってきた言葉の意味と矛盾してしまう。

何も長所が見られない……。簡単に言えばそういう子のなのだろう。でも、それが特別なことであることだとは理解できなかった。

「え……？　話を聞く限り珍しそうもないですけど……？」

何かに特化しているのが普通のことであるかのように言ってくるけど、私はどこかがほんの少しだけ伸びているだけでそれを伸ばすようにするのが普通だと思っている。

けど私の考えは少しだけ違ったみたいだった。そこを訂正すると同時に正しい部

分は肯定して博士は話をしてくれる。

「ただ目立ったところがないというならそうだね。その場合は基本的に何もできないんだ。能力がなさ過ぎて」

確かに私は特出している点がないと言われた。そして、それが例外的なことであるということも。そして新しく、能力がないと何もできないということを知った。

だけど、今はそれがどういう意味なのかは分からない。だからわかるように聞き返すことにした。

「能力がなさすぎる……？」

これじゃあ、私に能力があるって言っているようなもの。今まで一般人として過ごしてきたのに特別な人間だ、なんて言われてもすぐに納得ができるわけではない。

私の疑問に答えるために、博士は少し何かを考えるようなそぶりをしていた。ここから先は何か考えながら出ないと説明できないみたいだ。

「うん。君たちはこの異常を知るきっかけの原因が分かっているからじゃないかと思うけど、感じ取れたのは君たちの持っているものがあるからなんだ。多分それが近くにあるから感じ取ることができたんだと思う。そしてそれが君たちに能力を与えている」

博士は私たちがこの異変に気が付いた理由を話してくれた。話からすると何かを私

たちは持つっていて、それのおかげで今回の異変に気が付けたみたいだった。個人の能力とかではなく。

そう言われても、それが何なのかはわからない。だから、話を聞いて思ったことを博士に対して聞き出す。まだ、わからないことが多いみたいだから。

「それは身に着けていないと効果がないのではないのでしょうか？」

私がいまず疑問に思ったのは、そのアイテムを身に着けていないといけないのか。ということ。効果の範囲とか、そういうのをいろいろ知っておかないといけないと思ったから。

そんな疑問に博士はすぐに答えてくれた。

「いや、そうでもないんだ。これはかなり珍しいケースではあるんだけどそれを幼い時から持つていたみたいですからに力を送る通路みたいなものは君たちの中に形成されているんだ。それは今のスキャンでもわかったことなんだけど」

ここまでの話を聞いていろいろとわかってきたことを私はまとめる。

「じゃあ、今の話をまとめると特別なものを持つていたから違和感を感じることができ、それは私たちの能力にも関係するものである。そしてその物に近いほど効力が大きくなるということ。ですか？ それが私の特徴のないデータとどういう関係があるんですか？」

身に着けていない状況でも平気だけど、その物は近くにあったほうがいい。そしてそれは私たちの能力にも直接関係しているということがさっきの計測でわかった。そのアイテムは、私たちが昔から持っていたもの。ここまでの情報を聞いた私は、それが何なのかなんとなくわかった。昔から持っている、今は机にしまっているあれなんだと。

最後の私の疑問に対して、順を追って説明してくれていたみたいで、すぐに答えてくれた。

「それはね。君は今の状態で3人が扱う武器を同じくらいに使いこなすことができるかなんだ。今そのグラフを見せるけど特出しているのがAなんだけどさくらくんの場合ほとんどがBよりも大きく、限りなくAに近い数値を出しているんだ」

私の今の状態でほとんどの能力がいい結果を出している。そういわれた。今まで普通に生きてきて、運動も得意とは言えないし、それは勉強も同じ。銃なんて触ったこともないし……。だけど、博士の言っていることは全部がみんなと同等の力を持っているということ。

そのことを知った私は、何もできないのではないかと言われた時のように驚いていた。

「え……？」

言葉としてはしっかりと理解してても、そのことを受け入れられるかと言ったらそう

でもない。だけど、実際に事実であるため博士は続けて話を続ける。

「つまり君は魔法も使うこともできるし、長距離の銃を使いこなすことも剣などの接近戦だつてすることのできる柔軟性を持った人ということなんだ」

聞く限り、かなりチートな気がするけど……、博士が嘘を言っているようには感じられなかった。

でも、話を聞く限り、自分がどういいう行動をすればいいのかはなんとなく想像がついた。

「そう……ですか……。じゃあ基本はみんなのサポート的な動きをすればいいんですかね」

スペシャリストがいるということはその3人が最大に動けるようにサポートをすればいいというような気がしていた。

だけど私の考えが、完全な正解ではなかったみたいで、博士はそういうことを訂正してくれた。

「そういうわけではないと思うよ。僕が思うに、君は基本は接近戦をしていたほうがいいと思う」

蛸ちゃんがいる近接戦闘を手伝うようにしたほうがいいと言われた。高攻撃力を持った蛸ちゃんがいれば何となく大丈夫な気がするけど……。

どうしてもそう提案してきた博士の考えがよくわからなかったため詳しいことを聞く。わからないうちはいろいろと聞いておかないと、後々に響いてしまうから。

「それはどうしてですか？」

私個人としては機動力に優れるといわれ、一撃の攻撃力が高い蛍ちゃんに任せたいほうが効率がいいと思つてただけけど……。

「おれ一人で何とかするけどなあ」

蛍ちゃんも自分でできるということをアピールするかのように入ってくる。

だけど、博士はしっかりと考えていたことを話してくれる。

「接近戦のほうが危険度が高いし、2人いればこそできることがあるから、そうしたほうがいいと思つたんだ」

話を聞いてそうだと思つた。近接戦闘は、最も近くで戦うため、危険度はある程度高くなってくる。そう考えると確かにサポートではなく全面的にそういう動きをする人が欲しいというのもわかつた。

ただ、まだ何もわかつていない状況でも自信はあるようで蛍ちゃんはそれでも食いがつて自分ならできるといつていた。

「それでも、おれは大丈夫だと思ふけど……」

それでも話していた内容には納得していたみたいで、少しいじけて話しているため反

対ではないみたいだった。いくなればできれば自分一人でもやってみたいと思ってる。という感じみたいだった。

納得できたから、話は次に進もうとしていた。というより私自身が先の話を決めないといけないということを感じた。

「どういったことができるのか教えてもらってもいいですか？ 博士」

いろいろとできるということは動き方次第で良いほうにもいくし、逆に悪いほうにもいく可能性ができていた。だったら少なくとも悪いほうにならないように何をやるかを決めたほうがいいと思った。

その質問に対して私たちができることを博士が考えてくれる。

「それは、1人がガードしている時に背後から強攻撃を当てたり、二手に分かれて敵をかく乱したりしやすくなる。そうすれば危険も軽減できるからね」

言われたことは、考えれば想像できる範囲のものだったけど、それを聞くだけでいろいろな戦術を考えることができる気がした。

そういうことを考えつくと確かに戦闘が簡単になるような気がしていた。

「確かにそういうことができれば優位に戦闘が進められますね。どう？ 蛍ちゃん。私はいいいと思っただけ？」

一番の問題はこの話に納得をしていたけど、乗ってこなかった蛍ちゃんがどうするか

ということ。嫌々やってもうまく動けるわけではないからね。

私の尋ねた質問に蛍ちゃんが少しそっぽを向いて答える。

「……まあ、やってみないとわからないだろ。それで話を聞く限りどっちがどういう行動をするかが重要みたいだし、やってから考える」

確かにそうだと思った。話に聞いていてもやってみて行動をしてみないとできるかどうかなんてわからない。蛍ちゃんの言っていることはもっともだと思った。

蛍ちゃんの発言は、やってもいいということと言っているようなもので、それを聞いた博士は少し安心した表情になった。

「じゃあ決まりつてことでもいいかな？」

これからのことがある程度決まり始めたことを博士の言葉で理解する。

「はー」

私はやることが決まったことでより一層やる気を出した。

ここまで話してきたことを博士がまとめてこっちに向けて話してくれる。自分のことは良くわかったけど、どういう行動をすればいいのかを確認する上では重要なことだと思う。

「じゃあ最後に確認するね。さくらくんが基本近接戦闘型で戦闘スタイルは様々なものを選べる。蛍くんが、完全近接戦闘型。紅葉君が、魔法を使った攻撃と後方支援。雪く

んが、超遠距離狙撃の担当。いい感じにわかれたんじゃないかな」

近接戦闘に2人、中距離のサポーターが1人、遠距離で敵を寄せ付けないのが1人。この役割分担ならかなり安定して戦闘が行える気がしていた。

そして、それぞれが望んでやりたいと言い出したこと。だからなのかみんなはすつきりとした表情になっていた。

「みんながやりたいと思えるものを選べてるからいいんじゃないかしら。嫌々やって極められるものでもないでしょうし」

未知に純粋な興味のある紅葉ちゃんは、不思議な力であるといえる魔法を使うことができ、雪ちゃんはゲームで使っていたからなのか銃が触れることにうれしくなっていた。

「銃が……触れる……!」

かなり興奮しているようで、前から思っていたけど、銃のことになる結構性格変わるよね。雪ちゃん。

続いて、体を動かすことが得意だという蛍ちゃんも、希望通りの戦闘の仕方ができていて嬉しそうに喜んでいた。

「いい感じじゃん!」

私もできることがあるという安心感と、いろいろできることへの期待で、今は十分

だった。

「それで問題ないです！」

これからいろいろすることがあるけど、それ以上に新しいことをやり始めるという新鮮な感じが今の私を魅了していた。

私たちの戦い方がある程度決まり、みんなが受け入れたことで話が収束し、これから違うことを決めなくてはいけなくなかった。

「決まったなら博士。あれを彼女たちを選んでもらいましょう」

それを先に提案したのは博士の助手の時雨ちゃん。でも、私たちからしたら何のことなのかを理解するすべはなかった。

だけど、時雨ちゃんの一言は博士に対しては十分に伝わっていた。博士はその言葉を聞くとすぐに頷いて私たちに向かい話し始める。

「そうだね、時雨くん。君たちには武器より先に、防具を選んでもらう。そつちがないと

危険だからね」

アレとはどうやら防具のことみたいだった。確かに、攻撃をすることよりもダメージを受けて命のかかわるようなことをが来たら意味がない。確かに一番最初に決めなくてはいけないもの何だと思う。

私の考えていることは今の話を聞いていたみんなが思っていたことだった。

「そうね。……で、どこで選ぶのでしょうか？」

もちろん、ああやって決めてもらうというってきたのだから用意はしてあんだと思う。そのことを予想して紅葉ちゃんは、博士にその防具を決める場所を尋ねた。

……紅葉ちゃんは素直に進めてくれているのに、蛭ちゃんは少しつまらなそうに、雪ちゃんに至ってはまるでこの世の終わりであるかのように絶望していた。雪ちゃん……、銃を触るのが伸びただけでそんな顔しなくても……。

ただ、そのことにツツコンでいては話がなかなか進まない。そう思っていたからこそ、反発していない今のうちに話を進めようと思っているようで、博士はすぐに紅葉ちゃんの話に同調していた。

「うん。時雨くんに案内をしてもらって。僕は簡単な魔法書を探してくるから、その間に決めておいてもらうと助かるかな」

博士は紅葉ちゃんのために今の状態でも簡単に使える魔法が書いてある本を持って

くるようだ。いろいろとやることのある博士と時雨ちゃんには頑張つて、としか今は言えないのがちよつと悔しい……。

すでに博士は本を探すためにこの部屋から出て行っていた。結構急いでいるようにしていたから結構遠いところにあるのかな？

「では、皆さん。もう一度僕についてきてください」

時雨ちゃんの言うように私たちは計測室に連れてきてもらったときと、この部屋に連れてきてもらったときのようによく時雨ちゃんの後ろをついていき、防具とやらがある場所に向かって歩き始める。

時雨ちゃんの案内で防具が置いてあるところについた。

「ここに様々な防具があります。まあ、防具といっても鉄の甲冑のようなものは皆さん

は付けられないと思うので、こちらで作った素材を使った、布製装備になります。その分、種類が多いので選んでください」

様々な洋服が並べられているところを見せられ、部屋も小さくなく、むしろ大きいぐらいの広さなのにその部屋いっぱいには報復が並べられていた。

その服の量は小さい洋服屋さんよりも大きく多種多様なものが置いてあった。これが全部防具であるというのだから結構驚く。

「ほええ。服屋さんみたいだね。こんなにあるのは」

もう、お店といわれても違和感の感じない装飾に、服の量。マネキンまであるし……。なんかいろいろとすごい。しかも、服の量が多いため、色とりどりの衣装ばかりで目移りしてしまうほどの量だ。

ただどここまで量があるのは少し違和感に感じる。出会ったときに言っていたことが本当ならここまでの量はないはずなんだけど……。

「ここにいるのはあんたたちだけじゃなかったのか？　なんでこんなにあるんだよ」

以外にもそのことを覚えていた蛍ちゃんは、ここにいる人が2人だけだったことを思い出して指摘する。

そのことに気が付かれ、多分理由が少し言いづらかったことなんだと思うけど、時雨ちゃんが顔を赤くして下を向いていた。

「……博士の趣味です。あの人、男物、女物構わずに服をそろえるって趣味があるんです。時々僕にも着せようとして来たり……」

やっと話してくれるということ戸惑っていた理由が分かった。この服の量はすごいけど、単純なおしゃれをするという目的だけで考えると、あまり向いている服が少ない……。

その苦労を知った紅葉ちゃんは、いろいろと着せ替え人形のようになっていた時雨ちゃんのことを同情して優しい視線で見守っていた。

「それは……大変だったわね」

女だからこそ分かる。おしゃれをしたいと思っているのに、着たい服とは違うものを着せられる苦痛。それがずっと続くのならそれは発狂ものだった。

でも、それは普通に女の子としての楽しみを満喫していたからこそ、わかるものだったみたいで雪ちゃんはそれに反応せずに、マイペースに防具を選んでいった。

「えーっと、カモフラージュに合うような服は……」

防具を探す時の雪ちゃんは真剣な様子で選んでいた。それは普通にファッションとして選んでいる時のようなものではなく、どうすれば命の危険がなくなるのかを必死に考えていた。

でも、今やることは決まっている。早く決めるものを決めて、早く次の段階に行かな

くてはならないのだから。

「まあ、そんなことより。あちらの方は選んでいるようですので皆さんもご自由にお選びください」

そのきつかけを作るために時雨ちゃんは、早く私たちに好きな防具を選ぶように言ってきた。

だけど、あの話を聞くと時雨ちゃんのことを大変そうだと思うが、私たちにそう言つて防具を選ぶように言つてくれる。早く選んで時雨ちゃんのトラウマを無くしてあげなきゃ。

「じゃあ、私は……。これにしようかな？ いや、こつちのほうがいいかも……。うう、多すぎだよー」

ただ、量が多い！ これじゃあ決めるのに時間がかかってしまう……。ごめん、時雨ちゃん……。

そんな私の考えを知らない蛍ちゃんは青の服がまとめられているところに向かい、あの程度見渡したと思つたら1つの服を取り出して呟いた。

「えっと、動きやすそうな服だから……。あ、これでいいや」

次に決めたのは、結構悩むと思っていた紅葉ちゃんだった。普通にフアツションとかしそうな気がしたんだけど、何かの決め手を見つけたみたいで、即決していた。

「はっ、これは……月!? もうこれ以外はないでしょうね!」

もう、決まっていないのは私と雪ちゃんだけだった。早く決められた2人に驚きながら、少し防具を選ぶのに焦りを感じていた。

「蛭ちゃんと紅葉ちゃんはもう決まったの!? 早いねえー」

そして残っている雪ちゃんを探してみると、両手に2つの服をもつて私の前に来ていた。

そのまま私に向かって雪ちゃんが聴きたいことであろうことを聞いてくる。

「ねえ、さくら。これとこれ、どっちがいいと思う?」

両手に持った服を私に見せてどっちのほうがいいのかを聞きたいみたいだった。だけど、持ってきたのはかわいらしい服ではなく、片方が真っ黒なローブを主要なものにしたやつと、もう片方が深緑を基調としたものだった。

純粹になんでこの2つに絞り込んできたのかわからない私は、雪ちゃんに聞いてみることにした。

「えっと、なんでそれにしたの？」

結構な量があるのになんでこれを選んで来たのかということだが、わからなかった。

私に質問された雪ちゃんは最初はきよとんとした表情をしていたけど、すぐにその理由を聞かせてくれる。

「こっちは草原とかで身を隠すにはもってこいだと思つたから。もう一つが夜に戦闘する時に目立たないように黒をメインとしたものにした」

確かに、2つの服は周りに溶け込むようなものになっていた。確かにスナイパーとしては見つからないようにしたいという気持ちもわからなくはない。

それだと片方はあまり、万能性がないんじゃないかと思つた。それは黒のほう。

「じゃあ、こっちなんじゃないかな？ 多分夜でも使えると思うし、黒のほうは昼間は目立ちそうだし」

これかが私の理由だ。昼間に活動することだつて多いし、それなら両方にも使えて、しっかりともう敵の用途で使うことができるなら緑のほうがいいと思つた。幸いにも緑というにはいろは濃く、深緑のような色をしていたから、夜も目立たずに行動できると思うし。

私の判断を聞いた雪ちゃんはずぐに緑のほうの服を胸に抱えて私に向かってニッコリと微笑んでくれていた。

「ならこっちにする。……ありがと、さくら」

少し恥ずかしそうにしているけど、私にとつてはとても心が癒されるような状況だった。

これで雪ちゃんも決まった。人に参考になる意見を言うのはなんだかすつきりするなあ。

「どういたしました。って私だけじゃん!? どうしよう……」

って思ったけど、私が毛が決まっていけないこの状況。まだ博士が来ていないから時間はあるんだけど、この状況は女として少し焦る。

そんな私を見かねたのだろう、紅葉ちゃんが選ぶのにアドバイスをくれた。

「さくらさんは好きな色とかないのかしら? まずはそこから絞ったほうがいいと思うのだけ」

普通ならそうやって決めていくのだが、いかんせん種類が多くて決まらないでいる……。

だけど、とりあえず好きな色だけ想像してみることにした。そうしないと絞ることすらもできないと思ったら。

「うーん。やっぱピンクかな？」

考えていくと真っ先に浮かんだのは一つの色だった。とても個人的に大事にしている色……。それを頭に入れてもう一度服のほうを見ていく。

色を私が話した時には、もう蛍ちゃんがピンクで分けられている場所を見つけてくれたみたいでその場所を教えてください。

「ならここら辺にあるんじゃないか？　なんか色ごとに分けられてるし」

きつと自分の服を探していた時に気が付いたのであろうことを私に教えてくれた蛍ちゃん。ごめん……。知ってたよ……。

そのことについては触れずに、色が集まっているところを知ったという面で私は驚いていた。

「本当だ！　ありがとう、蛍ちゃん！」

そしてその場所を見つけてくれた蛍ちゃんに感謝をした。これで少しは時間短縮ができる。

場所を教えてくださいました蛍ちゃんだけど、目的としている場所が武器のほうなので、ワクワクした様子で私このことをせかしてきた。

「早く選べよなあ。早く武器を見たいんだから」

うん。私も早く決めていろいろな武器を見たいと思っっているからできるだけ、努力し

ていきたい!

そう意気込んでいる時にまたしても近くから雪ちゃんの声が聞こえてきた。

「ねえ、これは? 似合うと思う」

その手に持っているのは自分の着ると決めていたものと、ピンク色で私の名前にある桜がメインとなった服だった。

その服を見た瞬間、自分の中の何か沸き上がるのを感じた。

「これ? おお! いいよ! こういうの! ピンクだけどしつこくなくて、ちよつと胸が開いている気がするけど……。ありがとうね、雪ちゃん!」

ピンクが好きだといってもピンクの濃いものが好きなのではなく、薄く、儂いものが好きだったためすぐそれを見た時に感動してしまった。

それからは決めるまでが早かった。雪ちゃんの持ってきた服を手に取り、抱き着いて感謝をしていた。これで謎のプレッシャーのようなものから向けだすことができた。抱き着かれた雪ちゃんが顔を赤くしていた気もするけど、今の私にはそれが気のせいだと思っていた。

私たちの防具が決まり、少しの間博士が来るのを待っていた。蛍ちゃんは少し退屈そうに、紅葉ちゃんは博士が持ってくるであろう魔法書を楽しみにしながら、雪ちゃんはまだ顔の赤みが引かない状態で。私はどっちかというときと蛍ちゃんと同じような感じで待っていた。……決めた防具を着て。

博士が用意したという防具を着ているところで本を持った博士がこの場所に入ってきた。ノックはしてきたが、そのあとにすぐに着替えられるわけもなく、そのままドアが開いた。

「おやおや、みんな選べたようだね。可愛らしいじゃないか!」

嬉しそうに私たちのことを見てくる博士を見て、私は時雨ちゃんの言っていたことが全く嘘じゃなかったことを悟った。……そして時雨ちゃんの感じた苦労も同じだということを証明することだった。

戦う準備 その2

防具を選び終わって着てみたら、突然ドアが開きそこから本を一冊持った博士がやってきた。きつとその本が紅葉ちゃんに渡す魔法の本なんだろう。

「いいじゃないか！ 僕が集めたものがここにきて可愛く着られているところが見れるなんて、感激だよ！」

そして時雨ちゃんに聞いたことと同じようなことを博士が私たちにやってくる。やっぱりどこか変人氣質があるみたい。……でも、本当にうれしそうだな。

ただ、博士のペースに合わせているとこれからやることに対して遅れが出てくるかもしれない。……雪ちゃんと蛍ちゃんは早く武器を触ることに期待しているから。

「博士。それよりも次があります。今熱くなっても彼女たちが困るだけです」

それにあまりの迫力に黙り込んでしまっている私と紅葉ちゃん。特に何も感じていない蛍ちゃんに、少しおびえてしまっている雪ちゃんの代わりに時雨ちゃんが博士にこれからやることを早くするように促す。淡々というその様で慣れているように感じていた。……余程着せ替え人形にさせられたんだね。

時雨ちゃんが言っていたことを聞いた私はある程度次にやることについて考えてみ

ることにした。

「それで……、次ってやつぱり……」

今は防具という名の安全装置を選んだ後にすることとなれば、次に必要なのは技術とかそんな大げさなものではない。それは単純で一番重要なものになってくる。

時雨ちゃんの指摘を聞いた博士は『やってしまった』と感じたのか最初の数秒はフリーズしていた。

「あ……ああ、多分想像通りだと思うよ。君たちの戦うための武器を決めてもらう。大本はさつき決めたからそこからある程度の好みや、自分に合うかとかを考えて決めていこう」

そして私が思っていたものを改めて博士が告げてくれる。……顔が少し赤くなっているけど。

この状況で身を守る防具を決めたのであれば、攻撃を必須とする今回では武器が必要になってくる。

博士の武器を選ばないといけないという部分を聞いた蛍ちゃんと雪ちゃんはさつきまで黙っていたのにいきなりテンションが上がった。

「やっど武器が触れるのか！　じゃあ早く行こう！」

「蛍の言う通り。早くあたしたちを連れて行って」

蛭ちゃんはかなり興奮気味に、雪ちゃんは声のトーンとしては変わってないけど目はすごくキラキラしていた。余程武器を触りたいんだと誰しもがわかるようにしていた。

でも、武器としてはもう決まっている紅葉ちゃんだけは少しだけ冷静に話をしていた。

「私は博士の今持つている本を渡してもらえばいいのだけれど、この2人がここまで興奮しているのだし、早く連れて行ってもらえるかしら？」

ただ、興奮気味の2人を見ていて早く落ち着いてほしいと思っっているのか武器を選びに行くように催促する。もちろん紅葉ちゃん自身がつかう武器の本を受け取りたいという話を話していた。

私としてはそこまで興奮しているわけではないけど、2人にはもう我慢ができないのが分かるほど……。博士、もう連れてってあげていいよ。

「もちろんだ。僕についてきて。今度は僕が案内するよ」

それが通じたのか、博士はドアを開け武器のある所に向かうため歩み始めた。

それにすぐさま追いかける雪ちゃんと蛭ちゃん。

「銃が……、銃が触れる!!」

銃が触れることに興奮を覚えている雪ちゃんと、どんな武器を使おうかと少し悩んでいるもののそれさえも楽しんでる蛭ちゃんが博士につきつきりでその後ろに私と紅

葉ちゃん、そして時雨ちゃんが付いて向かって行った。

そして武器のある場所に向かっている中で、博士の助手としてここにいる時雨ちゃんが戦えないのかどうかは私には気になった。

「そういえば、時雨ちゃんって戦えないの？ シズン博士はどちらかといえば研究職だし無理かもしれないけど……」

「そんなことはないですよ。僕は基本博士の護衛のようなものでもありますし、一応の戦闘スキルは持ち合わせています。おそらくこの後にある練習でお教えできることがあれば、口を挟ませてもらうつもりです」

私の問いに対してすぐに答えてくれる時雨ちゃん。そうか。時雨ちゃんって博士の護衛もしていたんだ。これは新しい発見だった。……でも今は何も持ってないし、どんな武器を使うんだろう？

博士の護衛に関しては時雨ちゃんが今話していたからわかったことだけどんな武器を使っているのかは私も思ったことを紅葉ちゃんが尋ねる。

「そうだったのね。ちなみにどんな武器を使うのかしら？ 剣？ それとも銃？ もしかして魔法？」

さっきの武器の種類の中でどの武器にあたるのか気になったのか紅葉ちゃんは時雨ちゃんにすぐさま尋ねた。……何か疑問に思ったらすぐに解決しようとするのかな？

急に尋ねてきた紅葉ちゃんにいやな顔一つしないで、時雨ちゃんは答えてくれるみたい。

「その中であれば僕が使っているのは剣の部類に入ると思います。細かく言えばカタナですが」

それが時雨ちゃんの使う武器だった。カタナ……私が使うことになるのが近接戦闘系の武器だったから少し心強い感じがした。……だって経験者がいるってことより今嬉しいことはないから。

私は時雨ちゃんの隣から顔を覗き込むようにして剣で戦うことについて教えてもらえるようにお願いした。

「じゃあ私にいろいろ教えてほしいな。今なにもわかっていない状態だから、少しでも技術を身に着けないと自分の身すら守れないからね」

いくら適合力があるからといってすぐに戦闘がうまくなるわけでもないし、全然戦えない様子でみんなの足を引っ張ってしまう可能性だって現状はゼロじゃない。だから私は最低でも自分の身は自分で守れるようになっておく必要があると思っていた。それで余裕ができたのであればみんなを助けながら戦うのだって夢じゃないし、私のポジ

シヨンのようにそういう役割になるというのは予想がついていたから。

そういう点を考えたとある程度のセオリーを知っている人に教えてもらえるのはアドバンテージがあるのかもしれない。このアドバンテージを活かしていかないとい!

唐突な私のお願いに時雨ちやんがすぐに聞き入れてくれた。

「いいですよ。僕にできることなら最大限助力しましょう」

今の状況でこんなに心強い言葉はないだろうと思うほど安心できる言葉を私は聞いた。

そういう話をしていると前の博士たちの歩みが止まった。博士たちの目の前には鉄製の大きな扉があつて、蛭ちゃんたちはその扉を興奮気味に見ていた。……後ろからわかるぐらいだから、余程武器に期待しているんだろうな。

「ここがこの研究所にある武器庫だ。中は重攻撃用武器に軽攻撃用武器、銃系統で分けてある。さくらくんたちはそれぞれの役割の武器があるところで好みの武器を選んでほしい。そのあとそれが自分にあつているのか模擬戦闘をして確かめる」

まず選ぶのは自分に合う武器。だけどどんな武器を選ぶかは私たちの考え次第。それに、どうやら選んだ武器を試せるみたいだし、これは何度も体験して自分に合うものを選ぶとかしてみたほうがいいのかな? まあ、最初はいろいろと考えると思うんだけど。

博士の言ったことをしつかりと静かに聞いていた蛸ちゃんと紅葉ちゃんは早くしてほしいのか博士の言ったすぐ後にこたえる。

「わかったぜ！ おれは先に選んでるからなく!!」

「あたしも、そうしておく」

蛸ちゃんが扉に触れると自動的に開く。駆け足気味にその武器庫に入っていく。それはまるでおもちゃにはしやぐ子供のよう。

あまりにも早い行動に私は唾然としながら蛸ちゃんたちの行ったほうを眺めていた。でも、ずっとそうしているわけにはいかない。私も武器庫に足を踏み入れた。

進みながらも私はこれから選ぶ武器の大まかなくりについて考えていた。

「え……。つてもう行っちゃった……。えっと、確か私の選ぶべき武器は……」

近接戦闘の武器だったと思う。さつき時雨ちゃんにお願いしたんだもん。しつかりとした武器を選んでいかないと！

そう思った私は時雨ちゃんが使っているというカタナに似ている武器がある軽攻撃用のエリアに向かった。

みんなが中に入っただけと、私も私でやることがあるのよね。それを実行に移すため博士に向けて話しかけることにした。

「博士。本を見せてくれるかしら？ 3人が選んでいる間に少しでも覚えたいのだけど」

私の強みは魔法が使えるということ。魔法は難しいという理由で博士はやめないかといってきたけど、せつかく使えるものだから使ったほうがいいと思う。……それに、やったことのない見たことのない知識が目の前にあるのなら私はそれに向けて探究していきたい。

私の発言に今まで忘れかけていたのであろう博士が答える。しかし、どこか都合が悪そうにしているのが気になるがとりあえずそのあとに続く言葉を聞く。

「あ……ああ、そうだったね。はい。……でも物理攻撃用の武器もあったほうがいい。特に最初は魔法を使うまでの時間が分からないから接近されたら紅葉君は何も太刀打ちできなくなってしまうからね」

詰まりながら話している博士の様子に先ほどまでの興奮した様子は見られなかった。なぜかしら？ 確かに博士の言い分もわかる。けどどんな魔法が分かっているかないこの状況で簡単にそういうことを決めることはできない。もしかしたら魔法で近距離戦

闘ができるものがあるのかもしれないのだから。

なかなか魔法の本を渡してくれない博士にしびれを切らした私は、博士の言ったことを聞きながらも早く本を渡してくれるように話しかける。今はこういう時間ももつたいないと感じてしまうほど、早く本の中身が知りたくなつた。

「そう。でも今は魔法を覚えたいの。そつちの武器に関してはおとでもいいわ。だから少し一人になる時間を頂戴」

これが私の癖。集中したいときは必ず一人になる時間と場所を欲してしまう。……こうなつてしまふとなかなか元に戻らないらしいのだけど、未知に対しての好奇心を抑えきれないのだから仕方ないわね。

私の真剣なお願ひにとつとう博士は折れた。確かに難しいことらしいからここまで神経質になるのはわかるけど、それにしても大げさすぎると感じてしまう。

「ああ、わかつた。じゃあもう一度僕についてきてくれ。これから君たちのプライベート空間になる場所に案内する」

でも、今はそんなことを気にしていないでこのまま博士が連れて行つてくれるという部屋に行くことにした。ようやく……ようやく魔法について知ることができるといふなことに胸を躍らせながら私は博士の後ろにびつたりくつついていった。

なぜかその時の博士の歩く速さが武器庫に来た時よりも早く感じたのは気のせい

だったのだろうか？

武器庫の外でそんなことがあった同時刻に虫はようやく重攻撃用の武器エリアに足を踏み入れた。おれの主な役割は火力担当になるためこういう一撃一撃の攻撃力の高いものを選ぶほうとしていた。……んだけど、どこか違和感のようなものを感じたんだ。

「あれ……？ 思ったより少ない？ おれはもつとあると思っただけ……」

そこにあっただのは大本のくくりの武器につき1種類しかない武器が置かれていた。現在見れるのは、大剣と斧、そしてハンマー系の3つしかない。

もつと多くの武器があることを想定していたんだけどこの武器の数を見て少し拍子抜けする。しかしほかに見当たらない今、この中で決めていかないといけないというのはなんとなくわかっていった。

「しゃーなしか……。おれが使いたい武器、ねえ……。何がいいかな……」

おれは数少ないレパートリーでも何を使うのかを悩んでしまう。今まで使ったこと

のないものを使う好奇心と夢に見たものを触れるという期待感で1つをどうやって絞ろうかとまるでクリスマスプレゼントを選ぶ子供のような様子で3つの武器を眺めてみる。

ただじっくりと見て、自分がそれを振り回しているところを想像してみると、おれ自身が使いたい武器を1つだけに絞られるのを感じた。

「よっし！ おれはこれ！ やっぱ最初はオーソドックスな大剣だよな。ハンマーと斧つて上級者の使うイメージがあるし、とりあえず慣れるまではこれだな」

おれは横向きにかかっている大きな剣を手に取り、初めて触るからこそ得られる感動を覚え博士が待っているであろう武器庫の入り口に向かった。重いものを持っているはずなのに、おれの足はどこか軽々しく感じた。

武器庫に入っただけしばらく入り口が開く音がしなかったのに1回だけ開閉音が聞こえたところにあたしは銃の置いてある場所にたどり着いた。中はそこそこ広くここまで来

るのに少しだけ時間がかかっちゃった。

「おお!! これが銃なんだ!! ……ってなんか少ない」

あたしの使う武器はさっきの検査の後すぐに大まかなものは決まっていた。メインアームをスナイパーライフルにするということと、サブはハンドガンにするということ。ここにある武器としてはスナイパーライフルが2丁、ハンドガンが2丁あった。……使う気はないけどさ、なんでショットガンがないの？

まあ、使うには今足りないものを改善していかないといけないんだよね。あたしに足りないのは筋力。そのせいで反動の大きいものは使いこなすことができない。だからショットガンなんてまだ使えないんだけど、ない理由が分からないよ。

こんなに種類が少ないなんて考えてなかったんだけど。もっと多くあるイメージだったし……。これじゃあ考えていたのがあるかどうか……。

「あ、あたしの探してた武器があった！ そういえばFPSやった時に初めてスナイパーライフル使ったのもこれだったっけ……」

だけどその心配はなかったみたい。幸いにもあたしの考えていた銃がそこにはあった。それを少し懐かし気にその銃を見つめる。それはゲーム内では安価で手に入るもので、威力は少ない分反動も少ない。今のあたしにとっては最も最適なものだと言える。基本のワンショットワンキルはできそうにないけど。

あたしはすぐに立てかけておいてあるスナイパーライフルを手を取った。

『SSG08』。これなら今のあたしでも使うことができる！ 火力は不安だけど、その場合は立ち回りをしつかりすればいいもんね。いくらリアルだとしても、この法則だけは変わらないでしょ」

この銃の名前。『SSG08』がこれからあたしの使っていく武器だ。

初めて触った銃が、ゲームプレイをした時の初めてのスナイパーライフルになるなんてね。でも、これもある種の運命なのかな？

「しばらくお願いね。相棒」

あたしはこれから一緒に戦っていくSSG08に語りかける。そして、精いっぱい愛していかうと決めた。

それからずっとSSG08を触っていたけど、ふとまだ使うものが全部決まったわけじゃないことを思い出した。

「あ、ハンドガンも選ばないとね。もしも敵が近寄って着たりしたらスナイパーライフルじゃ分が悪いし」

あの時サブにハンドガンを選んだ理由がこれ。近接で最も強いのはショットガンな

んだけどその反動に耐えられるほどの体ができていない今、ハンドガンで耐えるしかない。それにハンドガンなら牽制で撃って、その隙に移動できるから何かと都合がいい。

2種類しかないハンドガンを眺めあたりは使えそうなものを選んだ。

「弾は小さめのものがベストだから……。やっぱりこれかな『FN Five-seven e N』。早い初速とそのおかげでつく貫通力がきつと力になってくれる。お願いね。第二の相棒」

SSG08の時と同じくしてFN Five-sevenのほうにもあたりは語りかけた。これからしばらくは一緒に戦う相棒に少しでも馴染んでおきたかったから。

もうこの武器は、ただのものではなくなった。あたしにとってはともに戦う相棒で自分の命を任せる大事な存在。そのことを胸に秘めながらも少しだけ興奮気味のあたりは武器庫の入り口に向かった。

2人に出遅れながらも武器庫の中に入った私は、入り口で決めた通り軽攻撃用の武器

があるエリアに来ていた。思ったより少ないんだけど。

「……にしても種類ごとの武器の数は少ないのにそこその種類は集めてるんだ」

私の目の前にあるのは蓋のついていないショールケースに入っている軽攻撃用の武器がある。

種類は片手用の直剣と少し曲がっている曲刀。カタナ、そして短剣、細長いレイピア。この5種類があった。

しかしそこにあるのはそれぞれの種類につき一本だけ。自分に合う武器の種類は選べても本当の意味で手になじむ武器は探せないということだった。

少し選ぶのが難しくなったけど、とにかく自分が使いやすいと思うものと、さっきのお願いを活かせるような武器を選ばないといけない。

「確か、時雨ちゃんが使ってるのがカタナだったよね。同じだと経験のある時雨ちゃんが使ったほうがいいし……、戦い方は時雨ちゃんにお願いするからカタナじゃなくてもそれに近いもののほうがいいかな？」

それを考えると長さは片手直剣のほうがあってるけど、形としては曲刀向きだ。短剣は長さが足りないからこの考えだと向きはしない。攻撃方法が刺すのがメインのレイピアも同じ理由でなくなる。ということとは、片手直剣か曲刀の2つの中から決めなくてはならない。

悩んだ私はとにかくどっちかを決めるために試しに2つの武器を握ってみることにした。

「……。曲刀は思ってるよりも斬撃が届くのが遅いんだ……。イメージのズレを考えるなら、片手直剣のほうがいいかな。……でも、何か私にしかできないことがないかな？」
軽く振りながら大まかな考えをまとめてみる。それに先ほども悩んだ通り、カタナでは時雨というエキスパートがいる。時雨に習えばある程度は戦えるようになるだろうけどそれでは所詮ただの劣化版ではない。だから私にしかできないことを探す。

いろいろ考えてみた私は武器の中にある1つのものが目に入った。それは真つ先に形が合わないかと判断して切り捨てたもの。

「短剣……。短くて軽いから隠し持ってもあまり気が付かれないし、剣と合わせて使うのは初心者でも難しくなさそう」

勿論、使いこなすのには時間がかかると思う。だけど基本的なパラメーターがそろっているみたいだし、片手直剣で戦っている時に少しだけ短剣を混ぜればトリッキーな動きができる。

私はそういうことを考え、片手直剣と短剣を握ってこの武器庫を後にして博士たちと別れた入り口でいなくなっていた博士と紅葉ちゃんを待つことにした。

……結局入ったのが一番遅かったからか、外では蛍ちゃんと言と雪ちゃん、そして入る時からいるのか時雨ちゃんが待っていた。大きな大剣を嬉しそうに掲げている蛍ちゃんに、黒光りしている大きな銃と小さな銃を感慨深く見つめている雪ちゃんが見れた。……本当にうれしそうな2人に少しだけ微笑ましいものを感じたのは私だけの秘密。

戦う準備 その3

博士に連れられてこれから自分の部屋になるといふ場所に來た私はその部屋に驚いていた。

「何なの……。私の部屋と全く同じじゃない」

私が普段生活していた自分の部屋と全く同じものがそこにはあったから。でも……なぜ？ あの部屋は私の家族と私自身しか知らないはず。それなのに完全に再現されているこの部屋に私はある種の恐怖を抱いた。

そんな私の感情を察知した博士はその不安を取り除くためか言葉を紡ぐ。

「どうやら驚いているみたいだね。説明するとこの部屋は君たちが一番リラックスできる空間を作るためにこういう部屋割りを作っただけだ」

確かに博士の言う通り、自分の今まで過ごしてきた空間があるだけで心の余裕はできる。それは本当にありがたいことではあるのだけれど……。

問題があるのなら、それは博士が男性であるということかしら。同じ部屋を作るといふことは絶対にあることをしないとできないはずだから。

「いったいどんな手を使ってこんなことをしたのかしら」

やったこととはある程度予想が付く。部屋のレイアウトは本物を見ていないとできない。そんなのは誰が考えたってたどり着くことができる。だったら次に考えるべきなのはどんな方法を使ったのか。私たちの常識が通じないこの施設内では未知が広がっている。それを知りたいという探求心が出てしまった。

でも、その方法を素直に答えてくれるという甘い展開にはならない。世の中そんなに甘くないということなのかしら？

「それは、残念だけど企業秘密かな。でも常識の範囲内での観察だったから君たちの心配していることはないから安心して」

この常識はきつと倫理に関すること。のぞき見をしていたのは認めるけど、着替えやその他女性が嫌がる場所での観察はしていないと、きつと博士はそう言いたいのだろう。

私としても見られるのはあまりいい気はしない。それは無断であるのならなおさら。

それに、今日……数時間前に初めて出会った男性のことをいくら博士だからといって完全に信じられるかというところでもない。

「出会ったばかりなのにそこまで信用はできないのだけれど……」

何か嘘があるのではないか。そんな考えが私の中に芽生える。目の前で起きている状況と人物を見て。

私にそう言われると博士は軽く笑ってみせた。その笑いは何を企んでいるようなものではなく純粹な笑いだった。

「あはは。そうだね。でも、時雨ちゃんがいるってことである程度は察してくれないかな」

ここで私が失念していたことを思い知らされる。そうだ。この場所には博士だけがいるわけではない。助手である時雨さんもいた。だから全部が全部安心できるということではないが、同性の彼女が引き留めてくれていると考えるだけで幾分は楽になった。

とりあえずは納得ができた。時雨さんという存在がどんなにまじめな人であるかは少し一緒にいるだけである程度は理解することができたから。

「……そうね。あと1つだけ確認していいかしら？」

だから後は、過去のことじゃなく現在のことについて尋ねるのが先決だ。ずっとそうであると考えたうえで生活してしまっただけはこの場所はこころが休まる場所からただの牢獄になってしまっただけだから。

「何かな？」

博士が私の問いに首をかしげる。

そんな博士に私は今考えているうえで最悪なことが起きているのかいないのかを尋

ねる質問をする。

「この部屋には監視されるものはないのよね？」

今この瞬間だけは、世界の状況なんてどうでもいい。女の子として部屋を監視されているということは死活問題。そんなプライベートも何もないこの空間で過ごせなんて無理な話だ。

そんな私の最大級の質問に博士は首を縦に振った。その行動が意味するのは、……肯定。

「勿論だよ。君たちがこの場所呼んだ時点で個人を監視する意味はもうないからね」

その理由が博士の口から告げられる。思い返してみれば私がこの場所に来た時自身身の部屋からだった。あの光の扉を出現させるにはある程度部屋のことを知らなくてはいけなかったのだとしたら、この場所に来てしまえば観察に関してはもうしなくてもいいだろう。

そういう考えに至った私は博士の言葉を素直に受け入れることにした。とにかく見た限りではそういった機械も見られないことも、私の考えを後押ししたようだし。

「それを聞いて安心したわ。じゃあ、しばらくは一人にしてくれるかしら？ 集中したいの」

この部屋のことになったのならやることは一つ。この部屋に来ることになった最

大の理由。魔法を覚えるということをやりたいと博士にお願いをしたからだ。

ここに来るまで少し渋っていた博士だったが、この私の言葉には素直に従ってくれた。

「わかった。僕はそろそろ武器庫に戻るよ。彼女たちも選り終わってるかもしれないね」

確かに、そろそろ決まっていってもおかしくない時間だった。移動にそれなりの時間を使ったし、今こうして話している時だって時間は過ぎている。

かなり質問攻めにしてたせいかな少し長い間話過ぎたと思わなくもないけど。

そうやって博士は私のこれから生活していく部屋から出ていく。これでこの空間には私一人しかいなかった。

そして目の前にあるのは博士が持ってきた魔法書。これから私のやることはたった一つだけ。

魔法の知識を身につけるために本を読んで理解する。それだけよ。

私はこらえきれない好奇心を開放するかのように魔法書を開いた。

「これが魔法について書かれている本なのね。一体どんな内容なのかしら？」

ただ最初にあるのは本の目次。どんな本にでもあるこれからのページに何がかかっているかを読者に伝えるもの。その中身を見るとどうやら最初のほうが初心者用であるということが分かった。ならどんどんページをめくっていってあげな。

私は目の前にある読んだことが全くない魔法書に向き合っていた。この先には私のことを騒ぎ立てる未知がある。それだけで私の胸は高鳴っていた。

ページをめくると次に書かれていたのは魔法について。使う魔法について書かれているわけではなく発動方法の大まかな説明と、必要なものがかかっている。

「確か……博士が言っていた魔法の使い方はその魔法に関係する呪文を読んで、魔法陣を頭で想像することによって使うことができる、だったかしら。てことは魔法の効果と呪文、そして魔法陣も覚えなさいといけないのね。結構大変だけれど、面白いじゃない」
本に書かれている内容も博士の言っていたことと相違は内容だし、きつと正しいことなのでしょう。だったら覚えること、覚えるべきことはいろいろあるということなのだけれど、大丈夫。私ならできる。そういう確信が心の中に芽生えていた。

そんな気持ちで本を見てみると次のページから魔法の詳細がかかっている。使う魔法の名前、効果に発動の上で重要になってくる魔法陣など細かい説明と同時に書かれていた。

「え〜っと……最初にある魔法は……ボーボールね。博士が入門って言ってたってことはこれが基本の魔法ってことになるのかしら？ 『燃える玉よ、飛んで行け』……これくらいなら別に苦じゃないわ」

初めての魔法の名前と呪文、そして魔法陣を見てみた。円形ベースの赤で描かれているその魔法陣。複雑ではあるけどパターンを覚えてしまえばあとは何とかなる。それに意外にも呪文は簡単な言葉であったこともあり、それほど難しいと思えなかった。これが初球の魔法なのだろうけど、このレベルだったら洩る必要はないわね。……じゃあ、なんで博士は魔法を勧めなかったのかしら？

そんな疑問が私の中に出てくるが、難しいことになるかとさらに難しくなる。この先の未来を考慮すれば初めて手を付けるものに、それも知識が必要なことを後回しにするのは当然だと思い、いったんその思考を切断する。今は、目の前の未知に集中したいから。「この魔法陣は結構ありふれた感じのものなのね。覚えるのは四分の一のところだけで十分のようだし」

魔法陣の特徴は簡単に言ってしまうえば角度90度分の扇を4つ合わせたもの。形を覚え、頭に浮かべる程度なら基本となつている四分の一のデザインを記憶したほうが早いと私はそう考えた。

この後も次のページ、次のページとめくっていき魔法の知識を深めていく。この本に

書かれている魔法は簡単なものだと言っていたけど数が結構あるため覚えるにはそれなりの時間がかかるだろう。

それでも私はやり遂げるわよ。絶対に。

私たちは武器を選び、博士たちがどこにいるのかが分からないため武器庫の前で待っていた。時雨ちゃんもどこに行ったのかわかっていないことからむやみに移動しないように待機を選択したんだ。

「あ、博士。おかえりなさい」

武器庫の前で少しだけ待っているやってくる道から再び博士が戻ってきた。けど、紅葉ちゃんの姿が見えない。どうしたんだろう？ てつきり一緒にいると思っただけ。

「ただいま。3人とも武器は選べたのかな？」

私たちのところまでやってきた博士は周りを見渡して成果がどうだったのかを聞いてくる。今まで武器庫の中でやっていたことは、私たちの使う武器選び。それぞれが選べたから外にいる。

博士の問いに剣を持っていることが嬉しくなった蛍ちゃんが自信満々に壁に立てかけていた選んだものを博士に掲げてみせる。

「ああー！ この大剣がおれの選んだ武器だ！」

それは蛍ちゃんの身長くらいの長さの大剣だった。横幅も長いところは肩幅よりも広かなり重そうだけど蛍ちゃんは軽々持ち上げている。……これが適正ってやつなのかな？

そう考えていると今度は雪ちゃんが今までずっと抱え続けていた武器を博士に見せる。

「あたしも相棒を選べた。早く使ってあげたい」

雪ちゃんが持っているのはスナイパーライフル。綺麗な黒色で光っているその銃は

スナイパーライフルらしくスコープが付いている。これなら確かに遠くの敵にも太刀打ちができる。それと、腰についている少し小さめのハンドガンもきつと近距離用の装備なのかな。

じゃあ残っているのは私だけなんだ。2人は興奮気味に話していたけど私はあくまで冷静に。

「私はこの片手剣を選びました。いろいろ応用が利くと思ったので」

でも、なんか手の内を全部見せたくないと思うってしまった。だから私が言葉に出してみんなに見せるのは最初に選んだ片手剣だけ。それでも地面から私のおへそまでの長さがある。剣先が真ん中に集中している洋式の剣には左右両方に刃があるから注意して扱わないと自分が怪我しちゃうところも考えておかないと。……つて武器庫の中に鞘があつたんだつた。

私は慌てて鞘に剣をしまつて博士のほうに向きなおる。

そんな私たちの様子を見た博士は安心した様子で話し始める。

「うん。すっかりと選べたようだね。……移動ばかりで申し訳ないんだけど、あと2か所ほどついてきてくれるかい？」

そしてそのあとすぐにまた移動があるということが博士の口から告げられた。まあ、仕方ないことではあるけどかなり移動が多いとみている風景もそんなに変わらないか

ら飽きるんだよね……。

でも、その言葉を聞いた瞬間に蛍ちゃんの目が輝き始める。さつき話していた博士の言葉に何か嬉しくなるようなところがあつたのだろうか？

「武器が使えるのか!？」

あゝ。そういうことね。今まで武器を選びたいって言ってたけど実際は使ってみたというのが本音だったんだっけ。でも2か所つてことはそれとは違う場所があるつてことだと思いうからそう決めつけるのは少しだけ早いような気がするよ。蛍ちゃん。

その私の考えはあつていたみたい。なんでわかるのか。それは博士がすぐに答えたから。

「そつちもあるんだけど、紅葉ちゃんをもう案内したからね。君たちのプライベートルームに案内するよ。3人とも少し疲れたでしょ？」

だから紅葉ちゃんは博士と一緒に戻つてこなかったんだ。それにしてもプライベートルームまで用意してくれるなんて結構ありがたいかも。

……でも、今は時間的にもおなかの調子的にも1つだけやりたいこともあつただけ
ど。

「確かに、それにそろそろお昼だからご飯も食べたいね」

今に至るまでに今日はいろんなことが起こつていた。この場所に来たのもそうだし、

世界を救ってほしいとお願いされて了承して。防具選びというきせかえをして武器を選ぶ。あ、その前に適性検査もあつたんだっけ。今まで経験なんてできるはずもなかったことを連続して体験したんだから身体的にも精神的にも疲れが徐々に溜まってきている。

そんな私の言葉に、雪ちゃんが答える。それは、女の子としてはどうなの？　と思つちやう言葉だった。

「……………」はんなんて食パンだけでいい。それより早く銃を撃ちたい……。風穴を開けたい」

怖いよ!!　風穴開けたいって何に!?　それとちやんと栄養は取らなきゃダメでしょ!　雪ちゃんは少しやつれているんだからなおさら!!　そんな私の心の声は届くこともなかったけど同じようなことを考えている人がまだこの場にいる。

「そういうわけにはいきません。皆さんは体調を崩してしまふと困るんですからしっかりと栄養を取ってください」

それは時雨ちゃん。しっかりと栄養を取ってほしい。私の考えていたことと同じようなことを雪ちゃんに向けて注意してくれた。うんうん!　その通りだよ!　雪ちゃんは一杯ご飯を食べないとね!

でも少しだけわからない言葉があつた。なんで体調を崩されると困るんだろう?

人だったら体調を崩しちゃうのだって仕方ないと思うんだけど……。

「そういうこと。1人でも欠けるとその穴をカバーするのが大変になるからね。だからみんなが落ち着けるプライベートルームを作ったんだ」

あく。そうか。まだ全然戦いとかしてなかったから実感がなかったけど1人でもいなくなってしまうと他の人にかかる負担が大きくなっちゃうんだ。そうなると安定する戦いも安定しなくなっちゃう可能性も出てくる。それは確かに困っちゃうね。

だから私たちのプライベートルームが用意されたんだ。納得、納得。

ようやく手に入れた剣をまだ使えないとわかった蛍ちゃんは今まで少し黙っていたけど、会話に参加するように口を開いた。

「じゃあ、さっさと行こうぜ。早くいけばその分早くこいつを使えるんだろ?」

余程、剣を使って戦ってみたい様子で鞘に収まっている大剣を肩に担ぎ、早くプライベートルームに案内してもらおうように催促をする蛍ちゃん。

私としては早くお昼ご飯を食べたいんだけど、でもそれはとりあえず自分がこれから生活する空間を見てからでも遅くない。この先の目標は違うけど、通過点は同じだから私は蛍ちゃんに同意する。

「そうだね。じゃあ博士、お願いします」

そうして私たちは博士の用意し、今紅葉ちゃんがいるというプライベートルームに向

かった。プライベートっていうくらいだから一人ひとりに個室があるんだよね？
いったいどんな部屋なんだろう。大きいのかな？ 小さいのかな？ 身近に感じるものだから今までのことよりも期待して博士たちについていく。

武器庫を出発して少しするとドアの密集した場所に到着した。多分ここが私たちの生活空間となる場所だろう。それを告げるかのように博士はゆっくりと私たちのほうに振り向いた。

「ここが君たちの部屋があるところだ。左からさくら君、蛍君、紅葉君、雪君の部屋になる。完全防音だから外からの音も内側からの音も聞こえないし聞かれないよ」
私の部屋は一番左のドアなんだ。……あれ？ 他のドアは機械チックな自動ドアなのにこの部屋だけ木製で手押しなのになってる。なんでなんだろう？

それに博士が言っていたことも気になる。完全防音で内側からの声が聞こえないのはわかるけど、外からの音も遮断すると……

「へえー。あ、でもそれだと用事がある時に辛くないですか？」

絶対に使いづらひはずだ。だって部屋の外から誰が呼んでいるのかわからないんだよ？ 気軽に遊びに誘えないんじゃない？ ……あ、もちろんしつかりと戦いに関係することはやるよ！ でも、ずっと戦ってばかりだと疲れるし、みんなと仲良くならないといけないんだから少しは遊ばないとね！

私のそんな問いに博士はもつともだと思っているのか深く頷きながら聞いていた。

「確かに、でもその事についても対策済みだよ。部屋にはインターフォンが設置してあるからそれを押せば中に伝わる」

確かにそこには家の外についているようなインターフォンが設置されていた。壁と同系色だが少しだけ暗めな色をしているインターフォン。これなら外から呼び出すのも簡単だろう。

「じゃあ、いったいどんな部屋なのか入ってみますか？」

この部屋についての説明はきつともうないだろうと思つた螢ちゃんが自分の部屋だと言われた扉の前に立つ。

それに合わせるように雪ちゃんも。

「これからあたしたちが生活する場所になるのかな？」

これから私たちが生活するところ。この空間がきつと癒しの空間になるんだろう。

一体どんな風になっているのか私は楽しみになっていた。

「そうだね。さつきは言つてなかったけど基本的な生活はこの研究所内でもらうよ。詳しいことは紅葉君がいるときにするけど、4つの季節を取り戻すまではね」

あ……。プライベートルームがあるつてことはこれから博士の言うように、季節を取り戻すまではここで生活していかないといけないんだ。言われた時点で気が付けばよかつた……。

でも、1つだけ気になることがある。それは今日が何日で明日はどんな日であるかということ。

「えっと、明日から学校っていうのはどうなるんですか？」

私たちは学生だ。夏休みが終わればまた学校が始まり、勉強や部活動、委員会など様々なことをしなくてはならなくなる。それなのに、きつと私たちがいた世界とは異なるこの場所にずっといないといけないということは将来のことを踏まえると少しだけ不安になる。

「そつちも紅葉君がいるときに話すよ。ただ、心配いらないうことだけ言っておく」
どんなことがあるのかわからないけど、博士は心配いらなうと言つた。根拠はぶつちやけ言つちやうと全くないんだけど、とりあえずは信じることから始めないとね。詳しいことは後で話してくれるつていうし。

「そうですか。わかりました」

今は納得しておくだけにする。

そんな話をしてしていると用意されていた部屋に入った蛍ちゃんが大声を上げる。それを感情に表すなら驚きと少しの怒り、といったところだろう。

「……おい、いったいどうなった?! おれの部屋と全く同じじゃないかよ!!」

え……? 蛍ちゃんの部屋と同じ? どういうことだろう? そこは蛍ちゃんの部屋で同じも何も……。

「本当だ……あたしの部屋と同じ……。マシンも全部……」

そんな私の考えを打ち消すかのように雪ちゃんも同じようなことを言う。もしかして……同じっていうことは自分の家の部屋とつてことなの?

「え?」

私に疑問が生まれる。本当なのかどうなのか私は自分の目で確認しないといけない。自分に用意された部屋を。だってわかるのは自分の部屋についてだけだから。

「私の部屋だ……。博士、いったいどうなっているんですか!」

見てみれば私も、蛍ちゃんと雪ちゃんの2人と同じような反応をしていた。だって窓の外に見える景色以外全部、私がこの場所に来るまでいた自分の部屋と同じだったのだから。

こんなのを見せられてしまえば私に疑念が生まれる。どうして？ と……。
私たちの疑問はその1つだけ。それが聞ければひとまずは大丈夫だろう。

「ああ、それは紅葉君にも話したんだけど……」

だから博士の説明を待った。もしかしたら博士は敵なのかもしれない。そういう、疑念を抱きながら。……だって女の子のプライベートを覗き見るなんて女の敵以外の何物でもないでしょ。

そう言つて博士は紅葉ちゃんに話したというを私たちに教えてくれる。

とりあえずは納得できたと思う。リラックスできるように私たちの部屋を模倣して作つたということも、これを作るのに部屋を監視していたということも。

「そうだったんですか。でも、絶対にこれからは覗かないでくださいね！ 女の子にはいろいろあるんですから」

博士の心遣いにはありがたい部分もある。少しでも自分の知っているものがあると

いうことは実際ホツとしたところもあるから。けど、女の子の生活を監視しているところに関してはしっかりと注意していかないといけない。うっかり切り落としちゃうかもしれないから。博士の首を。

「安心してください。僕がそんなことはさせません。やったら切りますから」

そんな私と考え方が同じだった時雨ちゃんが安心してするように私たちに伝えた。うん！ 時雨ちゃんがいるなら大丈夫だよね！ 助手なんだもん、博士の命のブレーキはなつてくれる。

まあ、私は心の声でだったからセーフだったけど時雨ちゃんは言葉にしちゃったから博士が少し怖がっちゃったみたい。

「怖いよ!? やらないから安心して!! ……ゴホン。まあ、そんなわけだから安心してここで生活して」

博士は慌てて手をワタワタさせながら弁明する。顔もかなり焦っている様子で今までだらないながらもしつかりと私たちをリードしてくれていた人は思えなかった。そんな状態が恥ずかしかったのか咳払いをしてこの話題を終わらせた。……逃げたね。

そんな話をしていると紅葉ちゃんの部屋といわれていた場所から紅葉ちゃん本人が出てきた。あ、騒ぎすぎちゃったかな？ けど、紅葉ちゃんの表情は怒っているというよりきよとんとししながら私たちのほうを見ていた。

「あら？　あなたたち来てたの。音が聞こえなかったからまったく気が付かなかったわ」

さつき言われてたっけ。ここは完全防音で音を通さないって。でも、紅葉ちゃんが不思議がるのはなんでだろう？　先にこの部屋の説明を受けてたんじやないのかな？

「そういえば言ってなかったね。紅葉君……」

やっぱり博士は少し抜けているところがあるみたい。博士はここで私たちにしたような防音の説明を紅葉ちゃんにしていた。

紅葉ちゃんが話を聞き終わると納得したという風に会話を始める。

「そうだったのね。まあ、集中ができるから好都合ではあるかしら。それで自分たちの部屋とレイアウトが同じであることに驚いたと。今はそういう場面のようなね」

確かに音が聞こえなければ自分の集中も乱されない。特に魔法を使う紅葉ちゃんにとってはお助かることなんだと思う。……今度魔法の本貸してもらおう。

「まったくその通りだよ！ あ、そういう紅葉ちゃんはどうだった？ 魔法」

あ、部屋から出てきたということとは魔法に関してある程度は覗けたってことなのかな？ 博士には難しいことだって言われてたからどのくらい時間がかかるのかと思っただけど意外に早かったから少しだけ気になった。

「簡単なものだったら、おそらくできるはずよ。ただ、魔法陣を記憶するのが難しいから慣れるまで時間がかかりそうだけれど」

そんな私の問いに紅葉ちゃんは今までの時間で感じたことを話してくる。魔法陣も覚えなれないといけないんだもんね。書くわけではないから幾分楽だと思っただけだけれど複雑すぎるのを覚えるには時間がかかっちゃうか。

紅葉ちゃんの魔法の段階も知れたし、あとは空腹を何とかするかそれとも……

「じゃあ、早く練習してみようぜー。おれそろそろ限界だよー」

ずっと蛭ちゃんが言い続けている戦闘の練習をするか。私としてはご飯が食べたいんだけど……。

「うん。あたしも。この場所のことはもうわかったから早く撃たせてほしい」

どうやら蛭ちゃんも雪ちゃんもそれに紅葉ちゃんも少しでも早く試してみたいようだった。これじゃあ仕方ないかな。ご飯は逃げないし私もそれに賛成しよう。

蛭ちゃんたちの様子を見た博士は3人がうずうずしていることに気が付いた。

「……本当に限界そうだね。蛍君も雪君も、それに紅葉君もか。じゃあそろそろ訓練場に行つてみるかな」

博士のその言葉が私たちを本当の意味で戦いが始まることになるのだが、そこに向かうまでの道のりは重く長いもののように感じた。……お腹が空き始めているからかな？

いざ戦闘訓練

お腹がすいている状態で、みんなが戦ってみたいということで私たちは博士の案内で訓練場にやってきていた。

「ここがみんなが来たがっていた訓練場だよ」

そう言ってみせてくる光景は広い空間のある部屋だった。測定室のようにデータを
見る場所から訓練場の様子を見ているが、遮蔽物はおろかただの床しかない何も
ない空間が広がっているだけ。こんなところでどんな練習ができるんだろう？
相手は自分たち……とか？

「その顔はなんでこんなに何も無いんだろう？　って顔だね。さくら君」

はう！　博士に心の声聞こえてたのかな？　そんなにわかりやすい顔をしていた
……とか？　あ、でもこの光景見たらみんな同じことを思っちゃうのか。雪ちゃんも
なんか不満そうに見てるし。

「はい。多分同じことを雪ちゃんも思っているんじゃないでしょうか？」

それに、純粹になんてここまで何も無いのかは本当に気になるから早く話してほしい
と思う。……それにお腹すいてるし。

「あたしもそう思う。身を隠すところがないし、高低さなんて一切ないこの場所ではせいぜい打つ時の反動くらいしか参考にならない」

私に名前をあげられた雪ちゃんも今思っていたことを博士に向けて言い放つ。……わお。なんか聞いてるとその通りだつて気がしていた。ゲームをやつてるから地形を利用して移動法とかを理解しているからこそその言葉なのかな？

雪ちゃんの言葉を聞いた博士は、私たちに背中を向けて機械を操作し始めた。

「確かにこのままだとそれくらいいしかできない。戦う時の定石とかを理解できないから、あまり意味がなくなってくる。でも……」

博士がそう言つて、何かボタンを押すとそこには……

そこには、今まで何もなかったところには荒野が広がっていた。室内なはずなのに風が吹き砂ぼこりが舞っている。ところどころには岩が置かれ、身を隠すこともできる。砂で足を取られる可能性を考慮して戦闘しないといけない。確かにさつきよりマシな光景が広がっていた。

けど……。

「これでも武器を試すくらいにしかならない。移動して攻撃、つていうのはできるけど、攻撃する目標がないよね」

そう。博士が言うように攻撃する目標がない。ただただ素振りと移動を含めての攻

撃の練習ができるくらいで、敵と戦うのは本番だけ。そんな状況になってもおかしくなかった。

「そうですね……。でもそれって仕方なくないですか？」

でも、私はそれはどうしようもないことだと思った。だって、敵を用意するって外にいるような敵を持つてくるのも手間だし、効率が悪いと思う。

それに戦う練習をするにはきつと人とやったほうがいいんだろうと私はその場で納得をする。博士にまだ何も言われていないのに。

私の言葉に博士はまた機会を操作し始める。……あれ？　これってデジャブ？

次の瞬間に博士は機械から手を離して私たちのほうを向く。けど私たちの目は博士ではなくその後ろの訓練場内のほうへ行つた。

だってそこには……。今まで動くものなんて砂くらいしかなかったのにもっと大きな何かの生き物が歩いていたのでかから。

「ここはこうやっていろいろなパターンで訓練ができる訓練場なんだ」

そうして私たちの反応を見た博士はこの場所についてを説明してくる。確かにこれなら地形、敵の組み合わせ次第では本場にいろんなパターンが再現できそう。

「ほえ、なんだかすごいねー！　さっきまで何もなかったのに」

今日の前に広がる光景が、先ほどまで何一つないただの部屋だとは全然思えない。そ

れほどまでに急激に変わった光景だった。

けど今までそわそわして黙っていた蛍ちゃんは少しだけ思うところがあつたらしい。「でもこれ、触れるのか？ ホログラムとかいうやつだったら触れないんじゃないのか？」

あ……。そうか、今までこれが本物であることを前提に話を聞いていたけど簡単に用意できるなら触れないとかデメリットがあるのかもしれない。それに、なんかホログラムなら簡単に用意できそうだし。

「大丈夫だよ。これは科学と魔法を合わせたものなんだ。科学面で地形のレイアウトと敵の動きを、魔法でそれを生成している。だからしっかりと触れるから安心してよ」

へえー。……なんかよくわからないけど、魔法と科学を混ぜてしっかりと触れるようにしたって認識で大丈夫だよね？

あれ？ でも魔法って確か……。

「……博士は魔法を使えるのかしら？」

そう。紅葉ちゃんの言うように魔法って才能がないとできないものだんだけどそれを機械に組み込んだとなると魔法を使えるってことになのかな？ 博士が魔法がつかえれば紅葉ちゃんに教えてくれると思うからいいとは思うんだけど。

「僕は使えないんだ。ちよつと訳ありだね、こうした機械が作れたってわけ。だから紅

葉くんは魔法を教えることはできない」

けど、博士が言った言葉は使えないということだった。この機械も博士だけが作ってたっていうわけではなさそうだ。まあ、機械を使えるのには変わらないんだし問題ないかな。……壊れるような時が来たらきつと紅葉ちゃんが直せるくらいにはなってると思おうし。

博士の言葉に大きく息を吐きだした紅葉ちゃんの肩が少しだけ下がるののように感じた。残念だったのかな？

「そう……。私だけでやればいい話ね。わかったわ」

紅葉ちゃんがそう言いながらもその瞳には確実な闘志が宿っていた。やる気になるところを見てみると、紅葉ちゃんつて逆境に立たされると燃えるタイプみたい。なんか私と一緒にだ。

その紅葉ちゃんの発言はさらにはほかの人たちもやる気にさせる。ずっと銃を撃ちたいと言っていた雪ちゃんも、もう我慢の限界がきているらしい。

「……早く銃が撃ちたい。博士……」

雪ちゃんは博士にお願いするように銃を構えた。……構えた!? 雪ちゃん!? それはお願いじゃなくて脅迫だよ!?

「ああ! そうだったね。じゃあ始めようか! これから模擬戦闘だ!」

博士も冷や汗かいてるし……。でも、何はともあれこれから戦いの練習が始まるんだ。

そうワクワクしてきているのを感じると自然と空腹感が紛れてくることに気が付いた。……そういえばさつきまでお腹すいてたんだ。けど、不思議と今はお腹がすいていない。早く試してみたい。そう思っていた私には空腹なんて今はどうでもいいことだった。

「この部屋は4つあるから君たちがそれぞれ同時にできる。試したい地形と難しさを選べば自動でできるから各自で操作してほしい。僕は他にやることがあるから失礼するよ」

博士はどうやら他にやることがあるみたい。……操作自体は見てたからわかるけど、ちよつと不安があるんだけど……。まあ、何とかなるよね！

蛭ちゃんはずぐにこの部屋の訓練場に入って行っちゃったから私たちは別のところで行かないといけない。私は紅葉ちゃんたちと別れ1人で訓練場に向かう。これからより非日常的な事が始めるんだ。そんなことに少しだけ胸を膨らませて訓練場の中に入った。

中に入ってみると最初に入った部屋と全く同じだった。確か、この装置を操作するんだっけ。うーん。最初は試し切りができるのでいいかな。まだ振れるかよくわからないし。

私が試し切りを選ぶと操作室から見える競技場内に居合切りでよく見かけるものがいっぱい出てきた。

……よし！　じゃあやっていきますか！

私は競技場内に入り選んできた剣を構える。……んだけどすぐに試し切りができるわけではなかった。

計測室の扉が開くとそこにはさつき博士についていったはずの時雨ちゃんがいた。一瞬、なぜここに来たのだろうと思っただけ、それは時雨ちゃん言葉で解消した。

「さくらさん、手伝いに来ましたよ」

そうだった。戦いにおける指導を受けようとしていたんだ。私は戦うことができると言われたけどもちろん戦闘経験があるわけではない。テレビとかで戦っているところを見たことはあるけど、見るのと体験するのでは全然違うし経験者に話を聞けば、教

えてもらえばその分自分の身になっていく。だから私はカタナを使っているという時雨ちゃんに教えてもらおうとしたのだ。

このタイミングで来てくれたことは本当にありがたい。最初肩話を聞くことができればあとで直す手間を省ける。

「時雨ちゃん！　ちょうど今やろうと思ってたんだよ！　早くお願いしますー！」

博士から各自でやってほしいって言われた時は一人でやらないといけないものだとばかり思っていたけど、時雨ちゃんはこうしてきてくれたんだし初めは思いつきり甘えさせもらおう。ここに来てくれたってことは時間はあるってことだし、しっかりとできるまで見てもらうつもりだ。

それに、体の動かし方やその武器の特性をつかむためにはやっぱり経験者から聞くのが必要だもんね！

「時雨ちゃんは計測室にある機械を見て私かしっかりと設定することができたのかを
確認する。」

「……設定は出来たんですね。それじゃ始めましょうか」

「どうやら失敗はしていませんでした。じゃあこのまま試し切りを始めよう！」

「うん！　お願い！」

私がもう一度時雨ちゃんにお願いするの時雨ちゃんは笑顔のまま私のいる訓練場の

ほうに入ってきた。これで、いろいろと教われる！ 私はこれから先生になる時雨ちゃんの指導を待つのだった。

これから訓練が始まるというところで時雨ちゃんは私のほうに手を出しながら口を開く。

「では、早速選んだ武器を構えてください」

構えてほしいと言われた。どうやら最初から構えを教えてくれるわけではないみたい。私はどういう構えをすればいいのかなんて初歩の初歩ですらわからない。だから知っている構えを見よう見まねでやることしかできなかった。

「い、い、い」

私は、自分が想像をする中で一番いいと思う構えを試してみる。両手で柄を持ち前に垂直に立てる。剣道なんかでよく見る構えを試してみた。これならアニメとかでもよく見るし、実際に構えとしてあるわけだから間違いないだろう。そう考えての構えだつ

ただけど……。

時雨ちゃんの表情はどこかすぐれなかった。あれ？ 何か間違えちゃった？

「……さくらさん。それはカタナや大剣向けの構えです。片手剣の最大のメリットは片手が明くことにあります。だから……」

あ、確かにこれは片手剣だ。だから片手を開けるようにしたほうがいいってことになる。そうなると両手で柄を握っている私の構えは最初から間違えていたってことだ。それならさっきの時雨ちゃんの表情も頷ける。

時雨ちゃんは私に構えを教えるために私の左手に触れ、剣から手を離させた。すべすべな手に触れられて同性ながら少しだけドキツとするけど今は構えのほうに集中しないと……。

「スイングのしやすさを考えるとさくらさんは右利きですから右手で権を握って左足を半歩前に出してください」

そのまま私の体勢を少しだけ変える。半歩左足を前に出すと自然に左側が少しだけ前になる。足だけ出してと言われて足だけを出すのが目的じゃないなんてことはなんとなくわかる。だからどこか覚えのある足と上半身の構えをし始める。

「ハイっ」

左側は歌舞伎でよく見るように突き出している状態に私はなった。この格好……ど

こかで見た、いややったことはあるんだけど……なんだっけ？

そう考えているうちに時雨ちゃんから次の指示が入る。

「はい。では、剣のほうを右側に倒して構えてください」

私は刀身を倒すように右手側を構える。こうしてみるとさっきの覚えのある原因についてわかった。

「……これってテニスの構えみたいじゃない？」

そう。これはテニスのラケットの構えだ。厳密にはインパクトの瞬間の状態なのだけど、すごく身近すぎるか前に私は少しだけ拍子抜けしていた。

けど、こういう構えをするように言った時雨ちゃんは私の言葉に頷きながらも予想通りといわんばかりの表情をしていた。

「わざとですよ。初心者が複雑な構え……読み合いの構えを下って意味はありません。ですからイメージしやすく、なおかつ力の入りやすいか前にすればだんだん身になりませう」

確かに私は初心者だ。それを考慮しての構えだったみたい。定石とかそういうものは全く分からないから単純な構えのほうがいいのかも。何も考えない分力を入れやすいからこれはこれでいい！

なんでそう思うのか。それは……。

「……うん！ 振りやすい！」

実はもう振っちゃってるんです。あ、もちろん時雨ちゃんは遠くに離れてるからね。でも力の入れやすい。かなり違和感なく振ることができた。

この構えなら何とか戦っていくことができそう。そう私は思っていたんだけど時雨ちゃんの表情はまだ優れない。……また間違えたことしちやったのかな？

「ただ、この構えの弱点は左側が空いてしまうということです」

あ、そうか。確かにこの構えだと左側に何か来た時に対処できない。もしもこれが経験者なんだとしたら体の使い方であまりうまくいなせるのかもしれないけど、私はタダの素人。そんな体の動かし方なんて一切わからない。でも、初心者なのに弱点が丸見えだというのもだめなんだと思う。……あ、そうだ。

私は懐からこの剣と一緒に持ってきたものを時雨ちゃんに見せる。

「あ、じゃあこれはどうかな？」

剣だけを持つてきたと思ったら大間違い。私が少しだけ考えていたことがあってそれを実現するためにこの短剣を持つてきた。トリッキーな動きをするという点での実現はまだ難しいけど、少し変化を加えられるという点だとかかなりいい考えだったのではないかと、少しばかり自信が持てる。

多分、他の人だと2つの違う武器を使えるかどうかなんてわからないし、最初は無理

だと思うだろう。けど、私は違う。さつき時雨ちゃんが言っていたことも、正しいと言えど正しいんだけど、間違っているとさえ言えれば間違っていた。それは……。

「私ってこう見えても両利きなんだよ」

そう。私は右利きなのではなく両利きなのだ。といっても最初は興味本位で左を使ってたらいつの間にか使いこなせるようになっていたただけだけど、それが今になって生きるのかもしれないと思うとなんだかうれしくなる。

私の持ってきた短剣を見た時雨ちゃんはそれだと言わんばかりの反応を見せてくれた。

「でしたら左手に短剣を持ってみてください。小指側に刃が来るようにで」

この短剣は逆手持ちをするみたいだ。今回のこの短剣の役割が左側を守るといふ補助的なものだから左に刃があつたほうがいいんだろう。真ん中に来る攻撃は右手で何とかすればいいだけだもんね。

私は時雨ちゃんの言つた通りの構えを試みる。それと、さつき簡単に振ってみてわかつたことがあつたのでそれもついでに実践してみる。

少しだけ腰を落として重心を下に下げる。テニスの時もそうだったから多分こつちのほうが入りやすいんだと思う。それに下が安定すると振りも安定するからきつとこうやって重心は落としたほうがいいのだと考えて実行してみた。

「これでいい？」

その構えを私は時雨ちゃんに見せる。

「はい。それなら左も守れるでしょう」

今度は間違いなく時雨ちゃんの考える構えができたのだと実感した。明るい笑顔でそう言われるとなんか嬉しくなっちゃうな。だって、自分が考えたことさえも受け入れてくれたんだもん。普通にうれしいじゃん！

「じゃあ試してみるね！」

私はそう言うのと訓練場内に出てきている的に向けて切りかかる。テニスは学校の授業でやってたから少しはわかる。上下に振るよりもこうして横から振るのは驚くほど振りやすかった。切り返しもしやすいし左の短剣も速く切ることができる。

けど右を強く振りすぎると背中を向けちゃうからその力加減は必要かな。大振りには敵に完全な隙を与えてからのほうがよさそう。

試してみると意外にわかることと、良かったと思えるところを実感できて課題と、伸ばしておきたいところが少しだけ見えた。

「良い感じですね。では今度は敵を作ってやってみましょう」

私に動き方を教えてくれた時雨ちゃんはいつの間にか計測室のほうに戻っていて機械を操作しながら私に話しかけてくる。

時雨ちゃんは機械を操作し終わると私の目の前に白い光が現れる。あれは……さつき見たのと同じだ。博士が敵を出した時と……。

ということとは……来る!!

「……スイカ?」

そう思つてさつきの構えをしたんだけど、目の前に現れたのは敵というにはいささか知っているものだった。

敵として白い光から現れたのがスイカにジャック・オ・ランタンの顔を付けたようなモンスター。スイカにするくらいだったらカボチャのままでもよかったんじゃないかな!?

私がそうツツコんでいると計測室にいる時雨ちゃんから指示がはいる。

「倒してみてください。やることはさつきと変わりません」

確かにやることは変わらないけど!! けどまだ心の準備ができてないよ!

「う、うん!」

半ば無理やり相手をしないとイケなくなってしまうけど私大丈夫かな? 動く相手を切るなんてまだやってないんだけど……。

まあいいや! そう思つた私はスイカのモンスターに切りかかる。……はずだったんだけどスイカのモンスターが私に向けて突進してきた。

「っ……っ！」

その攻撃を見た瞬間に私は考えを改めないといけないことに気が付いた。そうか、敵だから攻撃してくるんだった。攻撃してくるといふことはこつちもダメージを受けるということ、ダメージを受ければ痛いし、つらい。そんなことを今まで頭から抜けていたことは少しだけ恥ずかしい。

けど今は考えているだけではだめだ。少しでも自分が安全になるために私は咄嗟に左の短剣で迎え撃つ。何とか左側に受け流すことができて私は無傷だった。けど、これが戦うってことなんだ。

さっきの受け流しでわずかながら肉を切り裂くときの感覚が私の手にはつきりと残っていた。嫌なものではあつたけど身を守るためには必要なこと。それに守るためにも……。

私は今、世界を背負っている。こんなところで立ち止まっていちやダメなんだ。蜷ちゃんの、紅葉ちゃんの、雪ちゃんの足を引つ張るなんてことは出来ない！ 時雨ちゃんや、博士も私たちに期待してここに呼んでくれたのなら、その期待に応えないと！

決意は決まった。私は真っ直ぐにスイカのモンスターを見た。今の私に高度な読み合いなんかは使えない。じゃあ……っ！

私はとにかく先に動くことで攻撃のチャンスをあげようとした。半歩前に出ている

左足を力いっぱい踏みしめて思いっきり前進する。そうすると普段出ないようなスピードで走ることができた。

私の急な行動にスイカのモンスターは驚いている。でも、それが隙につながっていた。

チャンス！ 当然私はそう思った。相手の隙が作れたらな大きい振りで攻撃しても大丈夫！

だから私は右手の片手剣を下からすくい上げるように切り上げる。攻撃が当たればこれは大ダメージにつながる。そう確信があった。

けど、距離感がまだつかめていなかったみたいで剣の先端がわずかにかすれるばかり。決定打にはならなかった。

最初からこんな大振りをしても当たらないかもしれないなんてすぐに考えつくこと。初めてのこの模擬戦闘で私は決意を固めた瞬間に冷静になることができていた。だからだろう。大振りを交わされたこのタイミングでも次の動きができる。

「ならー！」

上にある剣を今度は左下に向けて切り下げる。この攻撃は完璧に当たり敵は出てきたときの白い光のように消滅した。……一応短剣の追撃も用意してただけだね。私の初めての戦いはこういった感じに終わった。

ふうく。まだ慣れないから疲れたよおー。けど、これなら何とかやっていけそう！
蛭ちゃんたちは大丈夫なのかな？

これから

時雨ちゃんの教えを受けて何とかどういう風に体を動かせばいいのかを理解したんだけど、私は1つの重要なことを忘れていた。なぜ忘れていたのかはわかっている。さっきの模擬戦闘が心のどこかでは楽しんでいたんだと思う。そして私が忘れていたこと、それは……。

「……お腹すいた」

朝ご飯を食べてからもう数時間は経っている。それなのに模擬戦闘で結構動いたから私の空腹を後押しする結果になっていた。蛍ちゃんたちにつられて今この場所にいるんだけど、ここに来る前に私はご飯にしようとは言っていたのだ。けどやる気に満ち溢れていた3人には勝てなかったよ。こういう時の多数決って不利なんだね。

「そろそろおやつ時ですからね。いい時間ですし、休憩にしましょうか。皆さんも呼んで少し遅めの昼食にしましょう」

時雨ちゃんが腕時計を見ながら言ってきた。……つて！ もうそんなに時間が経つてたの!? 日常的に時計を身につける習慣がないし、……つて時計ないんだよね……。携帯も持ってきてないから私は時間が分からない。夏休みだったから体内時計も狂っ

ていたみたい。ということを考えていると虫の鳴く音が2つ聞こえた。……ん？ 2つ？ 1つの音の発生源は恥ずかしながら私のお腹だった。で、聞こえた音はほぼほぼ同じ。

ふと時雨ちゃんのことを見てみると下を向いて小刻みに震えていた。しかもどこか顔が赤くなっている気がする。

つまり、ここから導き出せる答えはただ1つ。

「時雨ちゃんもお腹すいていたんだね！」

「そんなにはつきり言わないでください!! そういうさくらさんだつて……」

「私は認めたよ、”も”って言ったでしょ？」

「あ……」

「そうと決まれば、みんなを集めてごはんにしよう!」
私がお腹がすいていること認めたことを知った時雨ちゃんの顔はますます赤くなっていた。そんな時雨ちゃんの手を取って私は走り出す。

蛭ちゃんたちのもとへ、ご飯を食べるために!!

私たちがみんなのもとに着くと、疲れ果てていた蛍ちゃん、ゆきちゃん、紅葉ちゃんがいた。汗だくで息の上がつっている蛍ちゃんはきつと動き続けたのかもしいれない。蛍ちゃんは大剣を使うからきつと私の何倍もつかれるんだろう。次に雪ちゃんと紅葉ちゃん。2人は基本運動が苦手みたいだから蛍ちゃんほど動いてはいないんだろけど同じくらい疲れていた。2人とも慣れないことに挑戦していたからしようがないと言えましょうがないのだけど、特に紅葉ちゃんは魔法という全く経験のないことを試しているのだから精神的疲労も多いだろう。

「ねえ、みんな。そろそろご飯にしない？ 疲れとれるし」

「ああ……。ちよつと疲れちまったし……。飯にするか……」

「そうね……。もう限界だわ。何とか使えるレベルまでにはなったのだし……」

「……………」

息の上がつっている蛍ちゃん、脱力きっている紅葉ちゃん、話せないくらいにつかれていまするけどご飯に行くのに賛成の雪ちゃん。よし！ これでやつとご飯にたどり着ける！

別段大食いつてわけじゃないけど運動したし、朝方時間もたってるしお腹がすくのは

不思議ではないはず。時雨ちゃんも同じだったし！

みんなを集めてこの施設の食堂にやってきた。時雨ちゃんの説明だと食券を発券してそれをカウンターに持って行くらしい。ここまでは一般的な食堂と同じだけどここは無料で、しかも料理はロボットが作ってくれるらしい。

とそんな説明を受けていると1人の男性の声が聞こえていた。模擬戦闘の時から別行動をしていたシズン博士だ。

「お、君たちも来たんだ。早く料理を持っておいで。一緒に食べよう」

「博士……。いつもマイペースなんですから……」

「いいから早く行こうぜ、おれ腹減ったよ……」

博士がいたことに驚くのではなく呆れている時雨ちゃんと、とにかく早くご飯を食べたい。私たちは博士に会釈をして券売機へと向かった。

券売機にやってくるとそこには豊富な料理の名前が広がっていた。私は朝がパンだったことを思い出し、今食べる料理を決め、ボタンを押した。本当にお金はいらないみたいですぐに選んだ料理の食券が出てくる。

その食券をもって私はカウンターのほうに行く。と、そこにはもうすでに選んでいた紅葉ちゃんがいた。

「あ、紅葉ちゃん。決めるの早いね〜」

「ええ……。ちよつと頭を使ったから甘いものが欲しかったのだけど、ちよつどいいものがあつたから選んでみたわ」

「へえ〜。何を選んだの？」

と私が聴くタイミングできつと紅葉ちゃんが選んだのであろう料理がベルトコンベアに乗って流れてくる。その料理は私も好きなデザート系の料理だった。パンケーキ。普通に食事にしても十分な量を確保できるほか、味付けでデザートにも主食にもなる優れもの。……なんだけどデザートにした場合カロリーが高いからあまり食べることはないんだけど。でも頭を使ったときは糖分が欲しくなるし、満腹感も得られるからきつとこれ以上にベストな食べ物はなかつたんだと思う。

「へえー！ いいな〜。おいしそう……」

「さて、どうかしらね。ロボットが作ったのであればまずくはないとは思うけど、美味しいかどうかは食べてみないとわからないわよ」

「それもそうだね……。あ、お願いしまーす」

紅葉ちゃんの言うとおりだ。初めてこの場所でご飯を食べるんだから美味しいかどうかはわからない。……。けどおいしそうなことには変わらない。きつとおいしそうなパンケーキを見たからか私は期待を載せて食券を出した。

「あ、さくら……。と、紅葉……」

「あ、雪ちゃん！ 雪ちゃんも決まったんだ」

「うん……」

「じゃあ私は先に席に行ってるわ」

そう言つて紅葉ちゃんは博士の座っている席に向かつて行つた。

たとえロボットが料理を作っているとはいえ、時間はかかるみたい。その間、雪ちゃんとちよつと話してみよう。ここまであまり誰かと2人で話す機会はなかなかなかったし。

「ねえ、雪ちゃん。雪ちゃんは何を食べるの？」

「ラーメン……。いつも、食べてたから……」

「おお!! 私もラーメン好きなんだ。醤油？ 味噌？ それとも塩？」

「……塩。今はなかなかがつつり行こうとは思えないから」

雪ちゃんはまだ疲れが残っているみたいで、話す速さも普通の時と比べて遅めだった。それに合わせるようにして料理も選んだみたい。さっぱり系の塩ラーメンは確かに気力がないけど、食欲がある時にはいいのかもしれない。油が気になるなら薄めればいいし。そう考えると、みんな考えて料理を選んでいるんだな〜って思うわけで。

「そういう、さくらは何を、選んだの？」

「私？ 私はね〜。じゃっじゃーん!! 焼き魚定食でーす!!」

「さ、魚……?」

「うん! 朝がパンだったから、和風のものが食べたかったんだ。それで元祖和食みたいなこれを選んだんだ」

そう。私は朝は軽めに昼をがつつり食べて、夜はほとんど食べないようにしている。だから運動した後であろうが何だろうが私は量が多めの料理を選んだのだ。焼きたての魚の香ばしいにおい、ふつくらたけているお米にご飯に絶対合うお味噌汁。うん! 紅葉ちゃんのパンケーキ同様おいしそう!

「魚、か……。嫌いじゃないんだけど骨があるからあまり食べない……」

「雪ちゃん、好き嫌いはダメとは言わないよ。けど食べれるならしつかり食べないと。……もしかしたらもう食べられなくなっちゃうかもしれないし」

「……そう、だね。あたしたちが何も出来なかったらこの料理たちも食べられなくなっちゃうんだよね……」

私たちの経っている立場はいわばそういうことなのだ。失敗したら、生態系は崩れてしまうし、これから命を落としてしまうかもしれない。例え、命を落とす可能性が低くてもゼロではない。1日1日がもう二度となくて、明日を迎えることができなくなってしまうかも、なんてことをこれが私たちのやることが決まった時から考えていた。

私だって魚はあまり得意ではない。けど、食べれるものは食べられる。雪ちゃんの言うように骨が付いているとどうしても食べる気にはならなくなっちゃう。

けどこの料理はそう思うことなく受け入れることができた。だって本当においしいそうなんだから！

「さくらはすごいね……。さつき決まったことなのに、そんなに考えて……。あたし、銃のことしか考えてなかった。少し、考え方を変えるよ」

「……って!! 私すつごくまじめに語っちゃった!? はう……」

「大丈夫、あたしはさくらの考え好きだよ」

「あ、ありがとう……。じゃあ私も行くね? 紅葉ちゃんたち待つてるし」

「うん、あたしもすぐに行く」

ちよつと恥ずかしいと思いつながら私も私は紅葉ちゃんたちのいる場所に向かった。

うう……絶対今の私の顔って……

「どうしたんだい、さくら君。顔が真っ赤だよ?」

「な、何でもありません!!」

ほら! 赤くなつてた! こういうの恥ずかしんだよ……。恥ずかしいんだよ!!

私はテーブルに持つてきた定食を置いてひたすら下を向いていた。

(落ち着け……落ち着け……。大丈夫、大丈夫……。恥ずかしくない……。恥ずかしくな
い……)

ひたすら心の中で自分にそう言い聞かせていた。……。じゃないと雪ちゃんに戻つてきたときにまともに顔合わせられないもん……。

なんとか平静を取り戻しつつある私は大丈夫だと思い、再び顔をあげた。ちようどそのタイミングで私の前は茶色い何かの壁がそびえ立っていた。

「え!? 何この壁!? どうしちゃったの!?!」

「落ち着きなさいさくらさん。それは壁ではないわ」

「そうだよさくら……。それは蛍の持つてきた料理……」

「腹減った腹減った。めちやくちや腹減ったからいっぱい頼んじまった」

よく見ると茶色い壁だと思つていたものはお肉の塊だった。

「ハン、バーグ……?」

「おう！ おれの選んだのはこのハンバーグだ!! 旨そうだろ!」

「確かにおいしそうなだけけれど……その量は何なの？ 食べられるの？」

「同意、蛭……これから苦戦する未来しか見えない」

そうだよね……流石に動き回っていたといつても今はただの女の子。そんな蛭ちゃんが上半身を完全に隠すまで積み上げられたハンバーグを食べることなんて……できないよね？

「本当に、すごい量だね……蛭くん……」

「なんだよ。食えるに決まってるだろ？ これくらいの量」

「……まさか日常的にその量を食べてるわけではないですよね？」

私たちと同じく驚く博士に、気になることを聞いて時雨ちゃん。……まさか時雨ちゃんの言っていることがあつてるなんてそんなこと……

「え？ 普通だろ？」

あつたく!?

蛭ちゃんの答えに私はもちろん、質問した時雨ちゃんまで驚いていた。ううん、時雨ちゃんだけじゃない、ここにいる蛭ちゃん以外の全員が驚いた。

「……………」

なんで私たちが驚いているのかわかっていない様子の蛭ちゃんだけど、私たちからす

ればなんでそんな量が食べられるのかが不思議だ。

なんて騒動がありながらも私たちは食事を進めていった。あ、料理はすごくおいしかったです。

みんなの食事が終わり、次はまじめな話が始まる。それはこれからどうやって分かってしまった季節を取り戻していくのかということ。私たちはまだ、季節がばらばらになってしまったということしか知らない。どういう風に取り戻していくのかも、どんなことをすればいいのかも今はわからない。

「博士。私たちって、具体的にこれから何をしていけばいいのでしょうか？」

「そうだね……。基本的にやることは1つだけさ。季節を取り戻す。けど……。そのやり方とか全く説明していなかったね……」

「そうね。どうやるかだけは聞きたいところかしら」

「分かった。少し長くなるけど……。まず、僕たちの世界には季節が4つあったんだ。

けど1つだけの季節が好きだという4人……いや5人がそれぞれ好きな季節だけを
持つて行ってしまったつてことは話したよね。それで、春の季節をスプリングが、夏の季
節をシューザが。そして秋の季節をフォーラとオータムが、冬の季節をニコラウスがそれ
ぞれ持つて行ってしまったんだ」

「……随分詳しくわかっていようだけれど、なんで名前まで分かっているのかしら？」
「あ……。そうだね、紅葉君の疑問はもつともだと思うよ。じゃあまずそこを説明しよ
うか。この5人は私の研究仲間だったんだ。季節について調べ、どうすれば季節をコン
トロールできるかを研究していた。その間できつと5人……。いやその時は4人だった
ね、がそれぞれ好きな季節を持つてしまった。それがいけなかったとは言わない。た
だ、1つの季節だけを好きになってしまった彼らは終了間際の研究の内容を使って季節
を分けてしまったということ。……僕がもう少し彼らを見ていれば起こらなかったこ
となのかもしれないね」

そういうことだったんだ……。今まで明るくしていた博士は言葉の最後で落ち込ん
でいる。でもそれは仕方のないことで後悔が残っているということ。けど、博士の話に
私は気になるところが1つだけあった。

「季節が別々になった理由はわかったんですけど、なんでさつきから4人とか5人とか
人数がバラバラなんですか？」

「あ、ああ……。そのことか。秋の季節を持って行ったフォーラとオータムはね、二重人格だったんだ。きつとこのラボにある物質生成に技術を使って2人に分かれたみたいなんだ」

「そうなんですか……」

私はこの答えで再び実感することになった。どれだけ日常から離れたところに自分がいるのかということ。二重人格を2つの人間にするとか、そもそも世界を季節ごとに分けるということが何とも日常離れしている。

「つと、で本題に入ろう。この季節を取り戻す方法なんだけど、季節を分ける段階で使った宝玉があるんだ。それを壊してほしい」

「おれたちのやることはそれだけなのか？ 宝玉を壊すだけならだれでもできると思うんだけど」

「確かに、蛍の言う通り……。あたしたちでなければならぬというのはなぜ……？」

私もそう思った。私たちが呼ばれたのは私たちがじゃないとできないことがあるからのはず。じゃあそれはいったい何なんだろう？

「君たちではいけない理由か……。それは、その宝玉を壊せるのが君たちだけだからだよ」

「私たち、だけ？ それはいったいどういふことなのかしら？」

「簡単に言えば君たちの持つている適正値がないと破壊できないんだよ。君たちと会った時……最初の時に行ったけど科学の力と魔法の力が合わさってるんだ。だから暴発しないように強度を高くしていたんだ。そうした結果一定以上の適正値以上でないと破壊できないようにしたんだ」

「つまり、私たちしか適正値を超えている人がいないというわけですね」

私がそう言うのと他の3人も納得したようにならずく。

「そういうことなんだ。だから君たちを呼んだってわけさ」

「なら普通に攻撃すればいいのね？ それでも戦闘になるとは思えないのだけど……」

「そこそこの目的地まで行つて、戦わずに宝玉を破壊することはできると思うんだけど……やっぱ難しいのかな？」

「きつと君たちの考えてるようなことはできないと思うよ。警備が嚴重だと思うからね。だから倒してどんどん進むしかないんだよ」

「そうか……。まあ、おれとしてはそっちの方が滅茶苦茶やる気が出るんだけどな!!」

「うん。あたしも……!」

「(そこそ隠れちゃダメとは言わないけどそれだと面白みもないものね」

「……皆さん、本当にやる気なんですな」

時雨ちゃんがる気になっている雪ちゃんたちのことを見てそう言うけど……。

「ねえ!? なんでみんなすんなりとその状況楽しんじやってるの!？」

普通の学生なんだよね!? 私とそう変わらない生活を送っていたはずだよね!? 柔軟がすごいんだけど……。

「まあ……私もやることはしつかりやるんだけどね!!」

「なんだ、さくらもおれたちと変わらないじゃないか」

「そうだけど……そうなんだけどね!! なんか緊張感とかそういうのがあるじゃん、普通」

「本当だよ。少し考えさせてしまおうかなと思っただけど、こんなにすんなりとはね」

「博士、そろそろ最後に決めることを決めましょう。準備にそれなりの時間もかかりますし」

「おっと……もうそんなに時間が経っていたか。じゃあこれからみんながどういことをするのか大まかだけでもわかってくれたよね?」

博士の言葉にみんながうなづく。

「じゃあ、今から決めることなんだけど最初にどの季節に行くかなんだ。そこで僕なりに考えてみたんだけど、やっぱり最初は動きやすい方がいいと思うんだ。少し暑いとは思うけど夏の世界に行ってほしい」

「おお!! おれの世界か!! 賛成! 行こうぜ」

「時間的にも今は夏のはずだしね。私も異論はないです」

「……あたしも」

「私も問題ないわ。ただ、運動といえは秋なのではないかしら？」

あ、確かに。運動の秋って言われてるくらいだもんね。紅葉ちゃんの言ってる事にも一理ある。

「確かにね……。けど秋の季節にいるのは2人。まだ経験が浅い今はあまり手を出さないほうがいい。そう判断したんだ」

「そう。確かにそう考えてみると今は相手にするのは早いわね。わかったわ」

紅葉ちゃんは博士の言葉を聞いて考えを理解した。今の私たちには適正値が多くあったとしても経験が圧倒的に不足している。よく創作物で目にする戦っている最中の勘なんてもの私たちにはない。だから少しでも強敵との激突は避けたほうがいい。理にかなってるとし、実際その通りだ。だから今は経験を……実戦経験を積まないといけない。模擬戦闘とは違う4人で力を合わせた本当の闘いの経験を。

「じゃあ、まず最初に取り戻すのは夏の季節ということ、これから頑張っていこう!!」
博士がみんなのやる気を出すように立ち上がって大声でそう言う。

「おぉー!!」

「よっしやー!!」

元気いっぱいにごぶしを突き上げる私と蛍ちゃん。

「……………」

無言で腕だけを肘を直角にしてあげる紅葉ちゃん。

「おお……………」

声は出すけど控えめに腕もそんなに上げない雪ちゃん。

四者四様の反応にこれからコンビネーションができるのか不安になるけど、私たちはまだスタートラインに立ったままの状況。

これからどうなるのかは私たちの努力で決まっていく。だから私は士気をあげられるようにしようと、そう心に誓った。